

# 高句麗の地名から高句麗語と朝鮮語・日本語との 史的関係をさぐる

板橋 義三

九州大学

キーワード: 「三国史記」地名、古アジア語、高句麗語、中期朝鮮語、古代日本語、  
言語接触、混成言語

1. 序論
2. 先行研究とその評価
  - 2.1 河野六郎
  - 2.2 李基文
  - 2.3 村山七郎
  - 2.4 清瀬義三郎
  - 2.5 C. Beckwith
3. 高句麗語とはどんな言語か
  - 3.1 高句麗語に関する資料
    - 3.1.1 「三国史記」地理志: 卷 35, 37 (言語資料面から)
    - 3.1.2 「三国志」魏志東夷伝 (歴史事実面から)
  - 3.2 既知語彙
  - 3.3 音韻の特徴
  - 3.4 形態・統語的特徴
  - 3.5 高句麗地名は高句麗語を表しているか
4. 古代日本語と対応する語彙
  - 4.1 基礎語彙
  - 4.2 数詞
  - 4.3 日本語との親縁関係
5. 中期朝鮮語と対応する語彙
  - 5.1 基礎語彙
  - 5.2 数詞
  - 5.3 中期朝鮮語との親縁関係
6. ツングース諸語と対応する語彙
  - 6.1 基礎語彙
  - 6.2 数詞
  - 6.3 ツングース語族との親縁関係

## 7. オーストロネシア語族と対応する語彙

### 7.1 基礎語彙

### 7.2 数詞

### 7.3 オーストロネシア語族との親縁関係

## 8. 結論

## 1. 序論

本稿はこれまで高句麗語が日本語に最も近いという仮説と高句麗語の夫余系言語はツングース諸言語と姉妹関係にあるという仮説について、「三国史記」地理志の巻 35,37 と先行研究を基にこれまで議論されてきた高句麗語の実態をより詳細に渡って探る。

高句麗語と日本語との親縁性は遠隔関係であるという漠然とした理由とその証拠不足からこの二言語間の関係が明確に位置づけられてこなかった。そこで、まずこの関係は遠隔関係であるのかどうかを基礎語彙と数詞で統計的数値も含めて検証し、この結論に基づき、日本語との親縁関係を更に論証し、その親縁関係をより確実な形で主張するものである。さらに高句麗語がどの程度ツングース語族やオーストロネシア語族と親縁性があるかを基礎語彙と数詞との対応で見えていく。

結論として高句麗語はツングース諸語との関係が希薄である為、その関係は地理的接触による借用ではなかったかと考えられる。またオーストロネシア語族との関係は地理的に遠いが、高句麗語との基礎語彙で一致を見るものがいくつか見られ、また日本語との一致も文法事項においても一致するものがあり、その同系性の判定は非常に難しいが、少なくとも接触による借用関係であると考えられる。

本来夫余系言語が中国大陸中南部または台湾付近から北上し殷語（中国の殷（商）[紀元前 1550 年から 500 年間]の言語）、チュルク系言語（cf. Dung Lyong Yi 1982）などと接触しながら、中国東北部、朝鮮半島の根元一帯に定着して生じたものである。その一方で前日本祖語は夫余系言語の時期に北上過程で分岐し日本列島へ先來する以前にもまた以後もオーストロネシア系言語と接触しそのまま定着して生じたと考えられる。

## 2. 先行研究とその評価

この節では系統関係を論じた先行研究を中心にその他適宜上必要に応じて重要であると思われるものを取り上げる。

### 2.1 河野六郎 (1945)

河野は日本と韓国の学者らが「三国史記地理志」、巻 35、37 に現れる高句麗の漢字地名の音読みと訓読みからその地名漢字を構成していた単語〔特に数詞〕の音と意味を割り出したものに対し、その単語、地名が果たして高句麗語を示しているのかという基本的疑問を投げかけ、またその解釈には様々なものがあり、古代日本語、中期朝鮮語、ツングース諸語、新羅語、百濟語に比較された単語からその親縁関係があるのかどうかを疑問視した。そのような疑問を持



ちながらも、その対応語から高句麗語の周辺言語との位置関係を推測した。

当時の研究成果や言語学の発展状況から鑑み、河野の疑問は漠然としたものであり、なんら具体的な疑問を呈しているのではないので、それに答えるべくもない。河野は高句麗語に関する基本的な研究をなし、その点では高く評価できると思われるが、さらにそれより積極的にその形成過程や周辺言語との関係づけを試みたことも評価しうる。しかしながら、より積極的な形で具体的な比較がなされなかった点で惜しまれる。

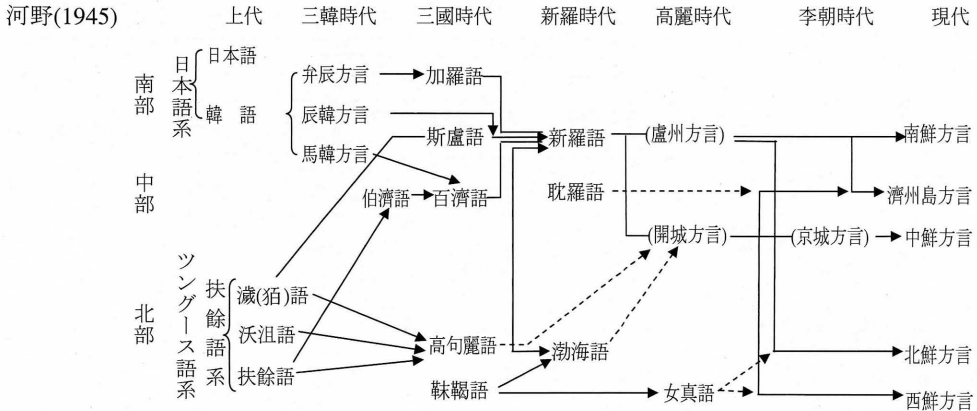


図1 高句麗語、新羅語、百濟語、古代日本語、ツングース諸語との関係

## 2.2 李基文 (1967;1972)

李は「三国史記」から構築された単語について周辺の言語と比較を試みた。その結果から高句麗語は新羅語、百濟語とは異なった言語であり、夫余系言語であり、ツングース系言語に帰着すると結論付けた。具体的には高句麗語の単語40程度を新羅語、百濟語、古代日本語、ツングース諸語、古アジア語などと比較し、その対応語を示しているが、その中で特に古代日本語と中期朝鮮語の対応語が多いことが目立つ。具体的に示した単語との比較は非常に生産的であり、高句麗語の謎を解く鍵の解明に寄与した。

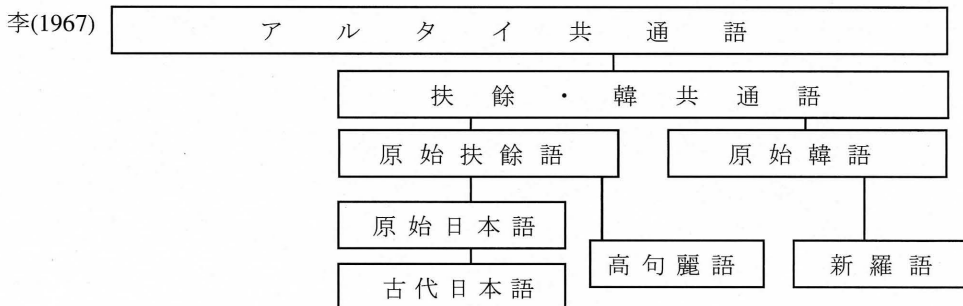


図2 高句麗語、新羅語、百濟語、古代日本語、ツングース諸語との関係

### 2.3 村山七郎 (1962、1963)

村山は上記の李と同様に高句麗語の地名を「三国史記」巻 35、37 により調べ、比較可能な周辺言語の語彙を著した。村山説では高句麗語と日本語の関係が最も近くその上位にこの両言語の祖語がありそれが新羅、百済などの韓系言語とさらにその上位に祖語を持ち、その上位にツングース祖語との共通祖語（東部アルタイ祖語）があるとする点が特徴である。

村山(1963)

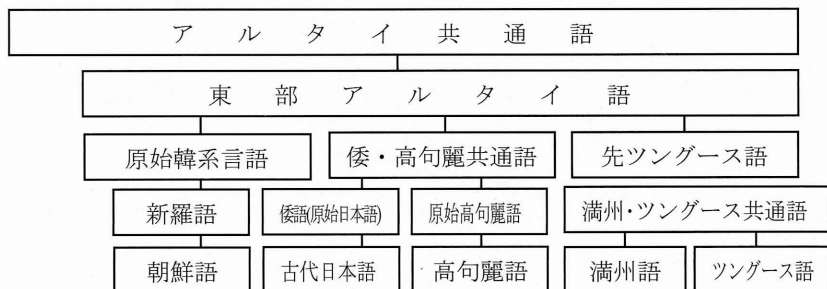


図3 高句麗語、新羅語、百済語、古代日本語、ツングース諸語との関係

語彙の比較可能語数（下記参照）から判断すると、高句麗語は古代日本語に最も近く、中期朝鮮語がそれに次ぎ、ツングース諸語がその後にくていること、そして日本語、中期朝鮮語に共通して同源語が見られるもの、日本語、ツングース諸語に共通して同源語が見られるものの語数から判断しても、同じようなことが言える。これは村山説を支持しているように見える。

### 2.4 清瀬義三郎 (1991)

清瀬は河野説、李説、村山説を概観し、借用がこの語彙を比較可能にしているとし、系統関係ではないと主張している。しかしながら、下記で見るように、四つあるいはそれ以上の数詞の類似は単なる偶然ではないことを示しており、単に借用によるものとすることはできないと考える。

### 2.5 C. Beckwith (2002)

従来の基本的な主張は高句麗語と同系と考えられる言語は日本語であるが、朝鮮語との関係、ツングース諸語との関係は同系関係であるというものである。しかし、Beckwith は、高句麗語と日本語との系統関係においては高句麗祖語が中国の呉、越のあった地域から北上し、中国東北部に至ったとし、中期朝鮮語やツングース諸言語とは全く異なる言語であり、古代日本語は高句麗語と同系の言語であるとしている。従って、日本語も中国大陸中部から北上してきた言語であり、中期朝鮮語やツングース諸言語とは全く異なる言語であり、古代日本語に見られる中期朝鮮語やツングース諸言語のいくつかの語彙は接触による借用であると主張している。

実際には Beckwith は従来取り上げられてきた高句麗語の単語よりも大分多い 125 程度を拾い上げ、そのうちの大部分が古代日本語の語彙と比較できるとした。しかしながら、その中には語がダブって記載してあったり、語それ自体の読みが不明確であったりするものがあり、実

際には比較できる語がだいぶ減ると考えられる（下記参照）。

以上典型的な説を概観したが、これまで網羅的に高句麗語の単語を検証してきたものではなく、ただ単に単語を周辺言語と比較してきたものだけである。本稿では高句麗語の中から重要であると思われる基礎語彙や複数の数詞を分析・比較した。さらには周辺言語のみならず接触関係があるだろうと思われるオーストロネシア語族との比較は本稿が最初のものである。

### 3. 高句麗語とはどんな言語か

これまで取り上げられてきた言語資料を取り上げ、どのように研究されてきたかを概観し、その内容の理解を深める。

#### 3.1 高句麗語に関する資料

##### 3.1.1 「三国史記」地理志（1145年）：巻35, 37（言語資料面から）

「三国史記」地理志の巻35, 37に高句麗語の地名からその漢字音の意味と音が理解できるが、これについては従来多くの論文（新村1916、1942；河野1945、1957；李1961、1968、Lee1963；愈1961；村山1963；Miller1979；Kiyose1986；Beckwith2002）が既に提出されているので、ここでは巻35, 37に高句麗語の地名からその漢字音の意味と音について簡単に述べておく。この資料の中でも巻37が中心であり、巻35は付随的に高句麗語の語彙の意味と音を示している。

「三国史記」地理志の巻35はすべて「本高句麗語」の地名のみを列挙しており、巻37はその冒頭に高句麗語地名を載せ、その後ろに百済地名などを同じ形式で列挙している。その巻の違いは前者が「新羅」と明記しているのに対し、後者は「高句麗、百済」と明記している。従って、巻37は高句麗語と百済語の基本的な文献であると考えてよい（cf. 李1972: 7-12）。その理由は以下に述べる。まず巻37に見られる164の高句麗地名が高句麗時代のものをそのまま記載したものである蓋然性が高い。これは例えば、

（あ）買忽 一云 水城

（い）七重県 一云 難隠別

この2例は一つの地名に対してそれぞれ二つの名称があることを示しているが、（あ）においては「買忽」（い）においては「難隠別」が本名であり、それに対して「水城」「七重県」がそれぞれの漢字音である。つまり、一つの地名に対する二つの異なる名称であり、「買忽」「難隠別」の中の「買」「難隠」が漢字音を利用してその漢字（「水」「七」）の読み方をそれぞれ伝えているものであり、「水城」「七重県」の「水」「七」がその意味をそれぞれ伝えているものである。「買」が読みを「水」がその意味を表していることは他の地名からも理解できる（巻37 水入県 一云 買伊県 など）。また地名の対応が一つしかないと判断される場合、例えば「難隠」が読みを「七」がその意味を表している場合、これは上記の地名「七重県」を「七」「重」「県」の三つに分けられると考えられるが、その分け方の信憑性には問題はない。この場合（「七」）

にはその強力な傍証としてツングース諸語の「七」を表す *nadan* や古代日本語の *nana* が比較でき、この酷似する語の存在は非常に重要である。

一般的に一つの地名に対して二つの名称が与えられているときにはそれらの漢字がその地名の読みと意味を表していると考えられる。上述のように地名から語の読みと意味が抽出できるが、この点では従来から言語学者の意見の一致を見ている。

### 3.1.2 「三国志」魏志東夷伝（歴史事実面から）

従来「三国志」魏志東夷伝（いわゆる「魏志倭人伝」：297 年以前）にはその記録は断片的であるが、以下のように描かれている：

1) 高句麗は「東夷旧語以為夫余別種、言語諸事多与夫余同、其性気衣服有異」（夫余族とは別種だが、言語、諸事で夫余と同じことが多い。性気や衣服には違いがある）とある。

2) 濊（わい）は「言語法俗、大抵与句麗同、衣服有異」（言語、法、風俗は高句麗とほぼ同じであり、衣服には違いがある）とある。（「後漢書」高句麗条（445 年以前）にもほぼ同様の記述が見られる。）

3) 沃沮（東沃沮）（よくそ）は「其言語与句麗大同、時時小異」（言語は高句麗語とほぼ同じであるが、時折小さな違いがある）とある。（「後漢書」にもほぼ同様の記述が見られる。）

これら 3 点の記述から高句麗語、濊語、沃沮（東沃沮）語は一つの語群をなしていると考えていいだろう。

4) 挹婁（ゆうろう）は「在夫余東北千余里、滨大海、南与北沃沮接、未知其北所極、其土地多山險、其人形似夫余、言語不与夫余句麗同」（挹婁は付与の東北方千余里にあって大海に沿っており、南方は北沃沮に接しているが、その北方は果てを知らない。その土地は山が多く険しい。人の様子は夫余と同じだが、言語は夫余や高句麗と同じではない）とある。

この記述から挹婁語は夫余系言語ではなく、他の系統の言語であると考えられるが、その参考として三上次男（1977：238－243）はこの言語を古アジア語の一つと見ており、特にその地理的位置からしてニヴフ（ギリヤーク）語ではないかとしている。この説を金芳漢（1983:97）は支持している。その説の可能性がないこともないが、方言的な差異とも取れるので、この歴史的内容の記述からではどちらとも判定しがたい。

これらのことから高句麗語は夫余語と同系と見ることができ、また高句麗語は濊と沃沮とは親縁関係にあり、姉妹語である蓋然性が非常に高いことから、高句麗語、濊語、沃沮語、夫余語は一言語群をなしていた（夫余系言語）と見做すことが可能である。それに対し、挹婁語の言語的位置は明確ではないが、上述の通り、可能性として、（1）同系であるが、遠隔的言語か、または（2）同系ではなく、他の語族に属する言語、のどちらかであり、共通の語彙は同源かまたは借用の語ということになる。

「三国志」魏志東夷伝による韓半島南部の言語状況を見てみると：

1) 弁辰（からせん）または弁韓（後の加耶）は「弁辰与辰韓雑居、亦有城郭、衣服居处与辰韓同、言語法俗相似」（弁辰は辰韓と雑居している。また城郭があり、衣服や住居が辰韓と同じである。言語、風俗は似ている）とある。

2) 辰韓（後の新羅）は「辰韓有馬韓之東、其耆老伝世自言、古之亡人避秦役、来適韓国、馬韓割其東界地与之、有城柵、其言語不与馬韓同、名国為邦、弓為弧、賊為寇、行酒為行觴、相呼皆為徒」（辰韓は馬韓の東方にある。その国の老人達が言い伝えるには昔秦国から秦の賦役を避けて逃れた人人が韓国に来ると、馬韓ではその東方の国境地方の土地を分け与えたという。ここには城があり、その言語は馬韓と同じではない。国を邦といい、弓を弧といい、泥棒を寇といい、杯を回すことを行觴といい、皆互いに徒という。）とある。

しかし、「後漢書」東夷伝（445 年以前）にも 2）とほぼ同様の記述が見られるが、最後の部分が異なり、「言語法俗有異」（言語と風俗は異なる）とあり、「三国志」魏志東夷伝とは矛盾した記載が見られる。これは両書の前半部の記載内容が全く同じ（弁辰と辰韓は雑居して、城郭も服装も同じ）であり、弁辰にかかる記載でも言語は辰韓と似ていると記載されていることから、自然に導かれる妥当な結論は言語もほぼ同じであり、後漢書の記述が誤りではないかと考える。

この上記の著者の理由説明とは別に金芳漢（1983：98－101）や金思燁（1981：18－19）ではこの記述は韓国に亡命した秦人に関する言語活動についてのものであって、土着辰韓人に関するものではないと断言している。事実その蓋然性は高いものの、それを裏付ける文献資料に乏しい。

3) 百濟（前身は馬韓）については「三国志」魏志東夷伝には記載がなく、「梁書」列伝諸夷（629 年）に次のようにある：

「今言語服章略与高麗同」（今言語、服装は大体高句麗と同じ）

この記述からみると、百濟語（前身の馬韓）は高句麗語とほぼ同じというのであるから、夫余系の言語であったことになる。しかし、それと同時に辰韓（後身の新羅）と弁辰（後身の加耶）は上記のように馬韓（後身の百濟語）とほぼ同じであったという記載から同系の言語と考えてよいことになる。方言的な違いはあったにせよ、全く異なる言語とは看做しにくい。

さらに「周書」百濟条（636 年）には以下のような記載がある：

「王姓夫余氏、号於羅瑕、民呼為間鞬吉支、夏言並王也、妻号於陸、夏言妃也」（王姓、夫余氏を於羅瑕（ワラカ）と称し人民は（これを）鞬吉支（コンキルチ）と呼ぶ。夏（中国）のことばでは『王』のことである。また妻を於陸（ワリユク）というが、夏の「妃」である）

この記述の解釈に関して主に二つに議論が分かれるが、河野六郎（1945：161-162,175）、李基文（1975：46-47）は百済国では支配者である王族は夫余系言語を用い、被支配者の民は韓系言語を用いたという混在型に解釈し、また李基文（1975：46-47）、金完鎮（1967：159）は辰韓の一国斯羅が4世紀ごろに勢力を得て新羅を建国したのであるから、新羅語と高句麗語とは別系の言語であると主張したのに対し、李崇寧（1967：345）、金芳漢（1983：102-106）、清瀬（1991：340-341）は同一言語の方言差であると主張した。筆者は後者（最後の説：方言差）を採るが、それは後に見る言語面からの理由による。

上述の歴史的 content の記述のみから言語について分かることは、満州地域も含め韓半島の北部、そして南部の言語はそれぞれの違いは少なからず存在したようであるが、その違いは全く系統の異なる言語による違いとは言いがたく、その際、語の借用も考慮に入れて考えなければならないであろうが、方言差によるものであらうと考えられる。即ち、北方の高句麗語、濊語、沃沮（東沃沮）語（挹婁語も含まれるかもしれない）は夫余系言語とし、新羅語、百済語、加耶語は韓系言語として二つの異なる言語群を考える必要がなく方言群としたほうがより適切であろうということである。言語間の親近の差異は夫余系言語と韓系言語の間ではある程度大きいとしても、それが全く異なる言語ほど大きくなく、両極に位置する2方言と見做すことができるのではないか（ここでは**夫余系方言**と**韓系方言**としてはどうか）と思われる。

上述の歴史的 content の記述のみから言語に関していえることと言語自体の記述から言語についていえることが一致しているかどうか調べる必要がある。この点について次の節でみていく。

### 3.2 既知語彙

抽出できるだけの高句麗語（KG）語彙をすべて取り上げ、それと比較対応と思われる古代日本語、新羅語、百済語、中期朝鮮語、ツングース諸語、その他のアルタイ諸語、その他の言語をこの順序で取り上げる。なお、中期中国語は MC とし、高句麗語に関しては\*はその語の漢字音からの読みを表し、\*\*は復元形を表す。また本来であれば、復元形をもって比較するのが基本であるが、復元できるものはできるだけ復元形と比較し、ないものはできるだけ古い形態素と比較することとする。

略語は以下に示す：

夫余・漢系方言：

高句麗語：KG	古代日本語：OJ	新羅語：SI	百済語：PK
中期朝鮮語：MK	古代高句麗語：OKG		

ツングース諸語：TG

エヴェンキ語：Evk	ラムート語：Lam	満州語：Ma	ナナイ語：Na
オロチ語：Orc	女真語：Jur	南ツングース諸語：STg	

その他のアルタイ諸語：AL

中期モンゴル語：MMo	古代チュルク語：OTk	モンゴル語：Mo	カルマック語：Kalm
-------------	-------------	----------	-------------

アゼルバイジャン語 : Azb チュワシュ語 : Chuv カザク語 : Kzk

タタール語 : Tat トルコ語 : Tk トルクメン語 : Tkm ウイグル語 : Uig オルドス語 :  
Urd ウズベク語 : Uzb

その他 : OL

古アジア諸語 : AA : ニヴフ (ギリヤーク) 語 : Nvh

オーストロネシア諸語 : Aus オーストロネシア祖語 : Pau

インドネシア祖語 : Pind オアセアニア祖語 : Poc

中期中国語 : MC 古代中国語 : OC

KG	OJ	SI
(1) *biar (別) [cf.李 72:22:*pjəl]	Fe <sub>1</sub> 「重」	----
‘-fold,layer (重)’	<PJ *piCa	
PK	MK	TG
----	pəl 「重」	----
KG	OJ	SI
(2) *bor (伐)	----	----
~*puruk (伐力) [清瀬 : 91 12]		
~*ibor (伊伐)		
~*ipur (伊火)		
‘green (緑)’		
PK	MK	TG
----	puru- 「緑」	----
KG	OJ	SI
(3) *bus v (扶蘇)	----	----
~*busi (夫斯)		
‘pine (松)’		
PK	MK	TG
----	pus 「松」	----
KG	OJ	SI
(4) *cinia (次若)	tuno 「角」	----
‘head (of a bull) (頭)’	<PJ *tunuCa	
PK	MK	TG
----	----	OL
		*tunu 「角」 (Pind)

Beckwith (2002:5) では対応語の意味にだいぶ開きがあるとして、この語は除外している。

KG	OJ	SI
(5) *cam (斬)	----	----
‘root (根) ~		
tree root (木根)’		
PK	MK	TG
----	----	----
		OL
		cam γ 「根株」 (Nvh)

Beckwith (2002) ではこの語は取り上げられていないが、単なる見落としかまたは故意に除外したものであろう。

KG	OJ	SI
(6) * γ ap (盒) ~*kap (岬)	yama 「山」	----
~*ap (押)’ west (西)’	<PJ *jama	
~* γ aip (峡)		
~*-ap (臘)	TG	AL
‘high mountain	dawakit/dawan 「峠」 (Evk)	dabagan 「峠」 (Mo)
peak (嶽~岳)’	dawa 「峠」 (Orc)	daba- 「山を越える」 (Mo)
< OKG* γ apma	dabagan 「峠」 (Ma)	
(盒馬; 蓋馬)	dawa- 「山を越える」 (Evk, Ork)	
‘high mountains	daba- 「山を越える」 (Na, Ma)	
(大山)’		
PK	MK	TG
----	----	----

Beckwith (2002:11) では古代高句麗語と前古代日本語が同系であると考えている証拠の一つにこの語を挙げている。

KG	OJ	SI
(7) *gu (仇)	ko <sub>1</sub> 「子ども」	----
‘child (童~童子)’	<PJ *kuCa	
PK	MK	TG
----	----	
		kuja 「子ども」 (Evk)
KG	OJ	SI



(8) *i- (伊)	i-r- 「入る」			----
‘to enter (入)’				
PK	MK	TG	AL	
----	----	i- 「入る」 (Tg)	ire- 「来る」 (Mo)	

Beckwith (2002:13-14) ではこのような単音節からなる語の比較は時折全くの偶然の一致であることがあり、その恐れはここでは除外することはできないとしている。

	KG	OJ	SI
(9) *iboc- (伊伐支)		----	----
‘neighbors (隣)’			
PK	MK	TG	
----	i’ uc 「隣」	----	

	KG	OJ	SI
(10) *kan (根) [B.02 5]	kauFe 「頭」 <*kami-Fe?		----
‘head (首～頭)’	kasira 「頭」		
	kabu 「頭」		
	kami 「頭髮；頭」		
	kaFo 「顔」		
PK	MK	TG	
----	----	----	

	KG	OJ	SI
(11) *kapi (甲比)		kaFi 「峡」	----
~*kap (甲)			
‘cave,cavern,			
hole (穴)’			
~*ap (押)			
‘tube (管)’			
< OKG * <sub>γ</sub> ap			
PK	MK	TG	AL
----	----	----	qapi <sub>γ</sub> 「入口、門」 (OTk)

Beckwith (2002:13-14) ではこの語は他の語族でも同音異義語が多くあり、言語普遍性の点から見ると、ここに上げたものだけを同源語とするのは問題であり、日本語、古代チュルク語との対応も否定するものではないとしながらも、同系を示す語として使うのは問題がある

としている。実際にはこのような単語はよく見かけるが、それだからといって地理性も考慮せず、また他の同源語と見られる単語との兼ね合いも考えずに言語普遍性を持ち出すのは逆に問題である。

KG	OJ	SI
(12) *kar (加戸)	kar-「刈る」	----
‘to plow (犁)’		
PK	MK	TG
----	kalai「犁」	halhan「犁先」(Ma)
	kal「刀」	gerbe-「(枝を) 折る」
	kal-「耕す」(Evk,Ork,Na,)	
		AL
		ker-「刈る」(*PA)
		kerci-「切る、溝を掘る」
		(Mo,Kalm)
		gerci-「細切れにする」(Urd)
		karti-「溝を掘る」(Chuv)

Beckwith (2002:7-8) では古代中国語からの借用としている。しかし、日本語、アルタイ諸語との比較を考えると果たして単純に古代中国語からの借用とはいいいきれないのではないか。

MK kal-「耕す」は福井氏の御教授 (personal communication:2002/11) によるが、この形態は kalai「犁」、kal「刀」とも直接関係しており、日本語、アルタイ諸語との関係も深いと考えられる。その関係は農耕文化との関連であるが、狩猟や遊牧を主とするアルタイ系民族の諸言語にも比較可能な語が存在していることはこの語自体が借用である可能性もある。

KG	OJ	SI
(13) *key (皆) < *kay	----	kan (翰、干)「王」
~*keyc (皆次)		
‘king (王)’		
PK	MK	TG
----	----	χ a γ an「王」(Jur)
		qan, qa γ an「王」(Mo)
		qa γ an「王」(OTk)

KG	OJ	SI
(14) *kəmur (今勿)	kuro「黒」	kəmur (今勿)「黒」
‘black (黒)’		
PK	MK	TG
----	kəm「黒」	----
		OL
		gəlap「暗闇」(Pind)

Beckwith (2002:2-4) ではこの語は意味が明示されていないとして高句麗語彙から除外している。即ち、「今勿」は「萬弩」に対応するが、この「萬弩」の意味が不明であり、また新羅語では同音語の「黒」と「金 (即ち、黄)」に「今」の音が対応するので、この「黒」をその

意味としたが、実際にはそのような音と意味の対応はないとしている。この解釈は多分正しいであろうと思われる。

KG	OJ	SI
(15) *kil~*kir~*kin (斤~斤乙) ~*γey (盼) 'tree,wood (木)'	ki;ko <sub>2</sub> i- 「木」	----
PK	MK	TG
----	----	----
		OL *kahiu 「木」 (Pau)

この単語は日本語とオーストロネシア語族のと同系性を示すものとして考えられているが、この形態素が驚くことに上記のごとく、高句麗語にも見られるのであり、この関係は単に偶然の一致ということでは片付けられないように思われる。実際に高句麗語の形態素は日本語の独立形態素に対応している点も見逃すことができない。

KG	OJ	SI
(16) *kir ~*kir (斤尸) 'letter, writing, streaks (文)'	----	----
PK	MK	TG
----	kil 「文」	hergen 「文」 (Ma)

Beckwith (2002:7-8) はこの語は高句麗語では本来二音節であり、「尸」は-rV の音節を持っていたと考えているが、その理由は納得がいくものであるにしても、そのことから即この対応語が系統的に無関係であるとはいえない。

KG	OJ	SI
(17) *kor (居尸) 'heart,mind (心)'	ko <sub>2</sub> ko <sub>2</sub> ro <sub>2</sub> 「心」	----
PK	MK	TG
----	----	huhun 「乳、乳房」 (Ma)
		AL kokuz 「乳房」 (OTk) ukun 「乳」 (Evk)

古代日本語の形態素が子音 k- の重複形からなっているが、その点ではアルタイ諸語も同様

であり、本来この重複形を持っていたようにも見える。高句麗語は第一音節が脱落したと考えられる形態である。その点も考慮するとこの比較は十分可能である。

KG	OJ	SI
(18) *ko γ oi (古衣) 'crane (鵠)'	koFu 「鵠」	----
PK	MK	TG
----	kohai 「鵠」	----
		AL
		qo γ u 「白鳥」 (MT k)

Beckwith (2002:12-13) では OJ kukupi を挙げているが、これは彼自身も注 22 で述べているように一般的な単語ではなく、一般的には上記の単語を挙げるべきであろう。彼はこれらの対応語は多分正しいとするが、このほかにチュルク系、印欧語、中国語などにも同様な形態がみられるので、これはオノマトペであるととし、これを系統関係を示す語彙として使うことはできないと反駁している。

KG	OJ	SI
(19) *ku rʔiy< **kuær γ iy (骨衣) 'wilderness, wasteland, to be rough (荒)'	----	koærceŋ 「荒」
PK	MK	TG
----	kæcul- 「荒」	----

KG	OJ	SI
(20) *kun[m] (功木) ~*kum (ok) 'bear (熊)'	kuma 「熊」	----
PK	MK	TG
----	koma (in 'koma-nΛrΛ) kom	kuma 「アザラシ」 (Evk) kuma 「アザラシ」 (Lam)

KG	OJ	SI
(21) *k v si (古斯) ~*k v si (古所) 'roe-deer (獐)' [B:02] 'gem (玉)'	kuciro <sub>2</sub> 「飾り腕輪」	----
PK	MK	TG
		AL

----	kusul 「宝玉」	gu 「玉」 (Ma)	gas 「玉」 (Mo)
		γun 「玉」 (Jur)	

Beckwith は「獐」という意味をつけているが、これは誤りであろう。特にこれについての説明がないので、この意味がどこから出たものかは判明しない。

KG	OJ	SI
(22) *χu rc	kuti 「口」	----
~*kure (忽次)		
~*kuar (串)		
~*k v ci (古次)		
‘mouth (口)’		
PK	MK	TG
----	----	----

この語は従来日本語との比較で最も重要なものとして考えられてきた。この高句麗語の語とともにその異形態\*k v ci (古次) が存在することで古代日本語の形態素との比較がより信憑性を増したと考えられる。

KG	OJ	SI	
(23) *χuər (忽)	ki 「城」	----	
~*kuər (骨)			
‘walled city, fort (城)’			
PK	MK	TG	AL
ki (己) 「城」	kol 「谷」	g olo 「街」 (Evk)	qol γ an 「城」 (OTk)
		holo 「谷」 (Ma)	

「谷」と「城」の関係が不明瞭であり、意味的關係が薄いと見られる。

KG	OJ	SI
(24) *ma (馬)	----	----
‘hard (not soft) (堅)’		
PK	MK	TG
----	---	mangga 「堅, 難」 (Ma)
		manga 「難」 (Jur)

mana「堅, 難」(Evk)

mana「堅, 難」(Lam)

この語は Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI	
(25) *ma (馬)	ma 「馬」	----	
‘horse (馬)’			
PK	MK	TG	AL
----	maɭ 「馬」	ma 「馬」 (Ma)	morin 「馬」 (Mo)
		mori 「馬」 (Na)	

従来この語は中期中国語からの借用と考えられるが、Beckwith (2002) ではこれも対応する語として挙げている。

KG	OJ	SI	
(26) * meir (買戸)	mira 「菰」	----	
‘garlic (蒜)’			
PK	MK	TG	AL
----	manɿ 「蒜」	----	manggir-sun 「蒜」 (Mo) ?

Beckwith (2002:9) では日本語との同源性はあっても朝鮮語、モンゴル語との同源関係はないとしている。

KG	OJ	SI	
(27) *meru (滅烏)	ma 「馬」	---	
‘colt (駒)’			
PK	MK	TG	AL
----	maɭjaci 「駒」	ma 「馬」 (Ma)	morin 「馬」 (Mo)
		mori 「馬」 (Na)	

KG	OJ	SI		
(28) *mey (買) ‘river (川) , water (水)’ < *mer	mi 「水」 (cf. nari (那利), nare (那礼) 「川」)	mur (忽) 「水」 (cf. na (那) 「川」) (cf. nari (川理) 「川」 (郷歌))		
PK	MK	TG	AL	OL

----	mil 「水」	muke 「水」	moren 「江」	m'ə 「川の源」 (Nivh)
		(Ma)	(WMo)	
(cf.nai (奈、乃) 「川」)		mü 「水」	mū 「水」	
		(Jur)	(TKc)	
		mu 「水」 (Evk)		

KG	OJ	SI
(29) *nabar (仍伐)	----	----
‘grain (穀)’		
PK	MK	TG
----	napuregi 「穀」 (慶尚道方言)	----

この語は従来取り上げられてこなかったが、Beckwith (2002) では「仍」の音読みを min-としているが、Baxter, Kargren によると、\*n-が復元され\*min-という形態は取っていない。

KG	OJ	SI
(30) *mir (密)	mi- 「三」	mir (推) 「三」
‘three (三)’		
PK	MK	TG
----	----	----

この語の対応は非常に重要である。それは従来言われて来たように日本語とほぼ問題なく対応し、さらに新羅語では\*seih 「三」が使われていたとするが、ここで挙げているように新羅語でも\*mir が使用されていた証拠が挙がっているからであり、そのことは新羅語の土着の言語は高句麗語と同系であった可能性が高いからである。

KG	OJ	SI
(31) *nami (内米)	nami 「波」	----
‘pond,lake (池、長池)’		
PK	MK	TG
----	----	namu 「海」 (Ma)
		lamu 「海」 (Evk)

この語は Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(32) *namur (乃勿)	namari 「鉛」	----
‘lead (鉛)’		
PK	MK	TG

---- nap 「錫」 ----

この語は Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(33) *nanin (難隠)	nana 「七」	----
‘seven (七)’		
PK	MK	TG
----	----	nadan 「七」 (Ma)
		nadan 「七」 (Evk)
		nadan 「七」 (Lam)

Beckwith (2002:13) は高句麗語のなかでツングース諸語と同源語として表れる語はこの語 nanin 「七」 だけであり、ユーラシア全体にまたがり見られる傾向がある (D.Sinor 1973 : Beckwith との会話) ので、ツングース諸語との対応は同源性を示すものではないとしている。しかし、逆に Beckwith の明言どおりであれば、ツングース諸語と日本語、そして高句麗語が酷似しているということを示す重要な語となり、大変重要な意味を持つものであると考える。

KG	OJ	SI
(34) *na (奴)	na 「地」	na (内) 「世界 (世)」
‘land,earth (壤)’		
PK	MK	TG
----	na-rah 「地」	nā 「地」 (ST g)
		nā 「土、地」 (Jur)

Beckwith (2002:10-11) では OJ no<sub>1</sub> 「野」と比較し、これは MK narah 「地」とは音声的に比較は不可能としているが、初めから OJ na との比較をしていないので、見当違いの対応である。さらにこれらはすべて古代中国語からの借用としているが、その可能性は無きにしも非ずであるが、南ツングース諸語の共通語彙の一つであるから、必ずしもその借用と断言することはできず、逆に南ツングース諸語の共通語彙の一つという可能性が高いのではないかと考えられる。

KG	OJ	SI
(35) *na (耐～那)	na 「中」	----
‘in, inside (内)’		
PK	MK	TG
----	----	----



この語はこれまで対応語として考えられなかったが、古代日本語には\*na 「中」(na 「中」-ka 「処」)があり、これと比較可能であり、同源性は高いと考える。

KG	OJ	SI
(36) *paɾiy (巴衣 ～波衣) ~*paɾey (波兮) ‘cliff (巖), rock (岩), precipice (峴)’	iFa 「岩」	----
PK	MK	TG
----	pahoi 「岩」	----
		OL
		pax 「石」(Nvh) *batu 「石、岩石」(Pau)

Beckwith (2002:11-12) ではこの単語は漢系言語からの借用であるとし、それに対応する本来の高句麗語の単語はɾap (盒) ‘high mountain [大山]’ であるとしている。

KG	OJ	SI
(37) *paik (伯) [李:72 26 *pak-] ‘to encounter,meet (遇～逢～迎)’	----	----
PK	MK	TG
----	----	baha- 「得る、見つける」(Ma) baha- 「見つける」(Evk) bak- 「見つける」(Lam) ba- 「見つける」(Na) baxa- 「得る」(Jur)
		AL
		bak- 「見る」(Tk)

Beckwith (2002:14) は意味上の一致がないので、この対応は問題であるとしている。

KG	OJ	SI
(38) *patan (波旦) ‘ocean (海)’	wata 「海」	----
PK	MK	TG
----	patah 「海」	----

この語は同源性として非常に可能性が高いものであるが、Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(39) *piriar [B:02]	----	----
~*birar (比烈) [清瀬 91]		
~*biri (比里)		
‘shallow (浅)’		
PK	MK	TG
----	----	biri 「浅い」 (Na)
KG	OJ	SI
(40) *puk (伏)	Fuka- 「深い」	----
‘deep (深)’		
PK	MK	TG
----	----	----
		OL
		*buka 「開いていること」 (Pau)

この語も大変同源語として可能性が高い語である。

KG	OJ	SI
(41) *saipuk (沙伏)	so <sub>2</sub> Fo 「赤土」	----
~*saipikon (沙非斤)		
‘red (赤)’		
PK	MK	TG
*sopi (所比) 「赤」	----	----

この語も従来取り上げられてきたものであるが、形態と意味から考えて、十分比較可能である。

KG	OJ	SI
(42) *seneri (沙熱伊) [清瀬 : 91 12]	----	----
‘breeze (清風)’		
PK	MK	TG
----	sənil- 「涼」	----

この語は Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(43) *sirap (尸臘)	siro;sira- 「白」	----
‘white (白)’		
PK	MK	TG
----	----	----
		OL
		*silaR 「光」 (Pau)

Beckwith (2002:7 注 12) では Miller (1979:358) に sirap ‘white’ を ghost-word として挙げていることを非難しているが、この語は実在したものであり、Beckwith の見間違いによるものである。

KG	OJ	SI
(44) *sork (息) [清瀬 : 91 11]	----	----
‘soil (土)’		
PK	MK	TG
----	hark 「土」	AL
	siro 「砂」 (Na)	siro γ ai 「土」 (Mo)

この語は Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(45) *su (首) [清瀬 : 91 12 *siu]	usi 「牛」	----
*v (鳥) [Beckwith 02:4-5]	(<u-si)	
‘cow,cattle (牛)’		
PK	MK	TG
----	syo 「牛」	----

Beckwith (2002:4-5) では「牛」という意味では OJ usi の u が KG \*v 「牛」に対応するのであり、OJ usi の-si (属格・修飾格とする) の部分ではないとする。従って、KG \*su は高句麗語ではなく前新羅語からの借用語とする。

KG	OJ	SI
(46) *su (首)	sa- 「若い、早い」	----
‘new (新)’		
PK	MK	TG
se 「新」	sai 「新」	----

Beckwith (2002:5 注 9) では MK の形態は高句麗語のそれと音声的に対応しないとして、対応語彙からはずしている。しかしながら、百濟語の形態を見ればわかるように、音声的な対

応は十分考えられるのである。

KG  
(47) \*surnyi~\*zwirnyi  
(述个;述弥)  
~\*suwney (首泥)  
'peak,summit (峯)'

PK

----

OJ

----

SI

----

MK

sunirk 「嶺」

TG

----

KG  
(48) \*tar (達)  
~\*tarir (達乙)  
'high (高)  
~mountain (山)'

PK

----

MK

----

TG

----

OJ

take<sub>2</sub> 「岳、山」

&lt; PJ\*talka-Ci (1)

&lt; PJ\*tsaka-Ci (2)

SI

----

AL

da<sub>γ</sub> 「山」 (Azb,Tk,Tkm)

taw 「山」 (Kaz,Tat )

tagh 「山」 (Uig)

tog' 「山」 (Uzb)

OL

\*sakay 「上昇」 (Pau)

この語の日本語における対応語は上記の通りだが、その祖語形は可能性として二つあり、一つはアルタイ系に帰着するものともう一つはオーストロネシア系に帰着するものであるが、この語の語末子音から考えると、オーストロネシア系に帰着する可能性が高いのではないと思われる。

KG  
(49) \*tawnpi (冬非)  
'round (円)'

PK

----

OJ

----

SI

----

MK

tung 「円」

TG

----

(in *tung-kur*- 「円い」)

この語は比較的に対応語として信憑性が高いと考えられる。

KG  
(50) \*tok (徳)

OJ

to<sub>2</sub>wo 「十」

SI

----

‘ten (十)’

PK

MK

TG

----

----

----

この数詞も非常に重要であり、特に日本語とのみ対応することが高句麗語との近さを窺わせる。

KG

OJ

SI

(51) \*t<sup>h</sup><sub>v</sub> ~ (\*t<sub>v</sub>) (吐)

----

tu 「堤」

‘embankment,  
dike (堤)’

PK

MK

TG

----

----

----

KG

OJ

SI

(52) \*t<sub>v</sub> ~ \*dzi (ir)

mi-ti 「道」

----

~\*tsi (ir) (助乙)

‘road (道)’

PK

MK

TG

----

----

----

この高句麗語の語は日本語の miti の ti の部分に対応し、OJ mi-は「御」であり、接頭辞であるので、語幹は ti である。従ってこの比較は十分に成り立つばかりでなく、その対応語としても蓋然性は高いと考える。

KG

OJ

SI

(53) \*usi γ am (烏斯含)

usagi 「兎」

----

‘hare (兎)’

PK

MK

TG

AL

OL

----

----

----

tabis γ an 「兎」 osk 「兎」 (Nvh)

(OTk? )

oske 「兎」 (Ainu)

この語は従来取り上げられてきた典型的な語例であるが、この対応として上げられている OTk の語は幾分比較する語として問題がないでもない。が、高句麗語は日本語とニヴフ語に非常によく対応している。それと共にアイヌ語にも対応しているが、これはたぶんニヴフ語からの借用と考えられる。その傍証としては他にもニヴフ語からの借用がアイヌ語には多く存在するからである。

KG	OJ	SI
(54) *uc (于次)	itu 「五」	----
< *uti ‘five (五)’		
PK	MK	TG
----	----	----

この数詞は対応語彙の中では非常に大切であるが、詳しくは数詞の節で説明を行う。この数詞に対応する中期朝鮮語 (cf. 塚本 1993) やツングース諸語はこれまで全く発見されていない。

KG	OJ	SI
(55) *wi (位)	----	----
‘similar (似)’		
PK	MK	TG
----	isis- 「似」	----

この語は Beckwith (2002) では取り上げておらず、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(56) *yac (也次) [李:72 21]	----	----
‘mother (母)’		
PK	MK	TG
----	-əzi 「親」	----

この語は Beckwith (2002) では欠落しており、これに対応する語も挙げていない。

KG	OJ	SI
(57) *yar (也尸)	tanuki 「狸」	----
‘wild (狂)		
badger (狸)’		
PK	MK	TG
----	----	----

Beckwith (2002:10) でこれまでの解釈として「狸」が挙げられていたが、これとは無関係であり、それはもう一つの意味に「野」の意味があり、これがこの「狂」と意味を共にしており、類似している漢字音「狸」はあやまりであるとしている。これは一見正しい解釈のように考えられるが、このほかにこの「狸」が当てられているものがあり、必ずしも「狂」と意味を共にしており、類似している漢字音「狸」はあやまりであると考えする必要がないであろう。

KG	OJ	SI
(58) *yawin (要隠)	yanagi;yanoki 「柳」 (<oc*yang ‘willow’ 楊?)	----
‘willow (楊)’	(<ya-na-ki <sub>2</sub> ;ya-no <sub>2</sub> -ki <sub>2</sub> )	
PK	MK	TG
----	----	----

Beckwith (2002) の発表ではこの語に対応する日本語の語を取り上げていないが、その可能性として上記の語を挙げておく。

KG	OJ	SI
(59) * v (鳥)	wino <sub>2</sub> sisi 「猪」	----
‘pig (猪)’	(<wi-no <sub>2</sub> -sisi)	
PK	MK	TG
----	----	----

この高句麗語の語\* v (鳥) は日本語の wino<sub>2</sub>sisi の wi に対応すると見る。

以下に複数の形態から復元した形態を見てみる。

KG	OJ	SI
(60) * *na (*nay (奈))	no <sub>2</sub> 「矢の竹」	----
‘bamboo (竹)’		
PK	MK	TG
----	----	----

この高句麗語の語は古代中国語の\*nay (奈) と対応すると同時に古代日本語の no<sub>2</sub> 「矢の竹」 にも対応するので、この語ならびにほかの古代中国語との関連を持つ語から高句麗語と古代中国語と何らかの関係をもった中国南部の地域から北上し朝鮮半島の付け根の部分に定着したと Beckwith (2002) は主張している。

KG	OJ	SI
(61) **tən (*tan (旦))	tani 「谷」	----
~*twən (頓)		
~*t <sup>h</sup> ən (呑)		
‘valley (谷)’		
PK	MK	TG
----	----	----

この語も従来典型的な対応語例としてあげられているものであるが、その信憑性は高いと考える。さらに高句麗語の CVC のタイプの形式が日本語においては CVCV の語末に母音が残存しているタイプに対応するもっともよい語例の一つである。

KG	OJ	SI
(62) *ur (于戸)	----	----
‘having neighbors (有鄰)’		
PK	MK	TG
----	ulh 「垣」	uri 「囲み、窪地、柵」 (Ma)

Beckwith (2002:9) では意味が対応しないとの理由からこの対応を除外している。しかしながら、このMKの語は人称代名詞の uri「私たち」との関係もあると考えられ、さらに MK ulh 「囲い」に対応するものとして満州語の uri「囲み、窪地、柵」などの意味をもつものとの関連もあると考えられる。

KG	OJ	SI	
(63) **wir	iri 「泉」	ər (乙) 「井」 (in *na-ər (奈乙))	
(*uyir[未]乙	wi 「井」		
~*uir[於乙])	< *wo-i/*wu-i		
‘spring,source			
(原) ; well			
(泉井)’			
PK	MK	TG	OL
----	----	uli 「川、水」 (Orch)	erri; eri 「江」 (Nvh)
			*way 「水」 (Pau)

この語の対応は日本語とニヴフ語にある一方、日本語のもうひとつの語にも対応し、それはオーストロネシア祖語に対応すると見られるので、ここでは判断がしがたいが、上記の高句麗語の異形態を考えると、オーストロネシアとの比較がより蓋然性があるように見える。

KG	OJ	SI
(64) **yana	----	----
(*yaya (耶耶)		
~*yana (夜牙))		
‘long (長) ? ; shallow (浅) ? ’		



PK	MK	TG
----	yath- 「浅」 [村山:63 27]	----

この語の意味が「長い」と「浅い」があり、どちらとも決定しがたいが、MK に「浅い」に対応する語があることから、その可能性をここでは探った。

# 文法形態素

KG	OJ	SI
(1) (65) *nə (乃)	no <sub>2</sub> ;na;ŋa 「属格・修飾辞」	----
「属格・修飾辞」		
PK	MK	TG
----	----	----
		*no,*na,*ga 「属格・修飾辞」 (Poc)

KG	OJ	SI
(2) (66) *si (斯) ~*si (史)	si 「属格・修飾辞」	----
「属格・修飾辞」		
PK	MK	TG
----	----	----
		*si 「属格・修飾辞」 (Pau)

KG	OJ	SI
(3) (67) *u (於)	-i	----
「派生名詞形成辞？」	「派生名詞形成辞」	
PK	MK	TG
----	-i	----
	「派生名詞形成辞」	*-i (Pau)
		「派生名詞形成辞」

## =====対応語が不明のもの=====

(1) *a (阿)	(2) *acin (阿珍)	(3) *biar (別)
‘to look down at, overlook (臨)’	‘poor, exhaust (窮)’	‘level, flat (平)’
(4) *im (音)	(4) *ir (乙)	(5) *ka ɣ wa (加火)
‘to inspect (監)’	‘beacon (烽)’	‘empty,China (唐)’
	beacon-fire (烽火)’	
(6) *kil~*kin (斤)	(7) *key (支) ~*ɣey (兮)	(8) *ku (去)
‘spirited horse, charger, bravery (驍)’	‘military, martial (武)’	‘poplar, willow (楊)’

- (9) \*kuər (骨)  
‘yellow (黄)’  
< OKG \*kweru (桂婁)
- (10) \*ku (仇)  
‘pine (松)’
- (11) \*k v (古)  
‘jade (玉)’
- (12) \*məwk (木)  
‘to evade, dodge, shun (閃)’
- (13) \*ma (馬)  
‘arm (臂)’
- (14) \*makin  
~\*makir (馬斤)  
‘a kind of tree  
[lit. ‘big willow’]  
(大楊)’
- (15) \*mawir (毛乙)  
‘ring, circle (圓)’
- (16) \*na (仍)  
‘female, yin (陰)’  
(or ‘iron’ ?)
- (17) \*nakin  
~\*nakir (仍斤)  
‘scholar tree,  
Sophora japonica  
(槐)’
- (18) \*mur (勿)  
‘bridge, roof-beam (梁)’
- (19) \*na (奈)  
‘big (大)’
- (20) \*nə γ ei (奈兮郡)  
‘white (白)’
- (21) \*nəir (内乙)  
‘sand (沙)’
- (22) \*puy (不) ~\*uy (尉)  
~\*<sup>m</sup>buy (未)  
‘country, nation (国)’  
~\*puy (非)  
‘commandery (郡)’
- (23) \*puy (非)  
‘Buddhist monk (僧)’  
< \*\*pur??
- (24) \*sayn (生)  
‘barrier, railing (闌)  
~ guard, keep (守)’
- (25) \*sin (省)  
‘walled city, fort (城)’  
MC\*<sup>s</sup>in (城) からの借用
- (26) \*sinti (省知)  
‘to transmit, narrate,  
follow (述)’
- (27) \*cupu~\*cubu (主夫)  
‘long (長)’
- (28) \*tawn (冬)  
~\*təyn  
~\*təin (丁)  
‘mountain pass (峠)’
- (29) \*tawn (冬)  
‘chestnut (栗)’
- (30) \*tawn (冬)  
‘drum (鼓)’
- (31) \*tawn (冬)  
‘iron (鉄)’  
(or ‘ring, circle’ ?)
- (32) \*tawn (冬)  
‘take (取)’

- |  |   |   |
|--|---|---|
| (33) *tawnpi (冬比)<br>‘to open (開)’   | (34) *tawr (刀[臘])<br>‘pheasant (雉)’     | (35) *ceyc~*dzeyc<br>~*cic (濟次;斎次)<br>‘hole,cave (孔)’   |
| (36) *c v (祖)<br>‘owlet (鳩)’   | (37) *u (於)<br>‘axe (斧)’                | (38) * u (於)<br>‘border (塞)’                            |
| (39) *ya (也)<br>‘nape (項)’   | (40) *γ w y (廻)<br>‘foot (足)’           | (41) **ca~**can (車~上)<br>‘chariot,cart (車)’<br>中国語からの借用 |
| (42) **w iy (*y <sup>w</sup> i) (唯)<br>~*γ w iy (淮)<br>~*v (烏)<br>‘ford (津)’ | (43) *c (次) < *ti [B 2002]<br>「派生名詞形成辞」 | (44) *v (烏) [B 2002]<br>「指小辞」                           |

以上の語彙（括弧内は後漢書の方向語 4 語を含めたもの）を統計的に見ていくと以下のようになる：各言語または諸語の％は全言語の同源語数に対するその言語の同源語数の割合

高句麗語語彙総数 ----- : 111 語 (115 語)  
 他言語に同源語が見られないものまたは不明なもの ----- : 44 語 39.6% (38.3%)  
 他言語に同源語が見られるもの ----- : 67 語 60.4% (71 語 61.7%)  
 日本語に同源語が見られるもの ----- : 47 語 70.1% (66.2%)  
 中期朝鮮語に同源語が見られるもの ----- : 32 語 47.8% (45.1%)  
 ツングース諸語に同源語が見られるもの ----- : 21 語 31.3% (25 語 35.2%)  
 オーストロネシア諸語に同源語が見られるもの ----- : 8 語 11.9% (11.3%)  
 日本語、中期朝鮮語に共通して同源語が見られるもの --- : 18 語 26.9% (25.4%)  
 日本語、ツングース諸語に共通して同源語が見られるもの - : 16 語 23.9% (22.5%)  
 日本語、オーストロネシア諸語に同源語が見られるもの -- : 8 語 11.9% (11.3%)  
 新羅語のみに同源語が見られるもの ----- : 8 語 11.9% (11.3%)  
 百濟語のみに同源語が見られるもの ----- : 3 語 4.5% (4.2%)

以上の語彙の統計的な数値から言えることはまず高句麗語は日本語との語彙が格段に多く、日本語との親縁性の近さを示唆しているようであること、これは語彙的に従来言われてきたことではあるが、このように統計的にそれも語彙をできるだけ挙げ裏付けてきたものはこれまでにない。ついで中期朝鮮語との近さが窺われるが、これも従来言われてはきたが、統計的に示したものは全くなく初めてここでそれを示す。次にツングース諸語との対応語だが、これも中期朝鮮語のそれよりかなり少なくなるが、それでもある程度あると見ることができる。ただツン

グース諸語との関係は接触による可能性もあるが、その点に関しては以下でみる基礎語彙から考えてみたい。

また日本語、中期朝鮮語に共通して同源語が見られるものも統計的に見てみたが、その割合はあまり多くないことがわかる。このことは古代日本語と中期朝鮮語とはあまり近いわけではないことを示唆している。またこの統計的事実からも従来言われてきたように、高句麗語は地理的に近い中期朝鮮語よりもずっと遠い古代日本語との関係が語彙数から見ても親縁性が高く、これは歴史的に前高句麗祖語が移動を繰り返してきたことによるのではないかと考える。さらに高句麗語と古代日本語の四つの数詞の対応はその関係の近さをまざまざと物語っているといっている。

古代日本語とツングース諸語に共通した高句麗語の対応語は古代日本語と中期朝鮮語に共通したそれよりも幾分少ないが、それでも共通語が見出せるというのは歴史的に濃厚な接触または親縁性があったからだと考えられる。その関係については下の基礎語彙との関連で見ていく。

「後漢書東夷伝」に現れる高句麗の五部族の名前に当たる語彙につぎのようなものがあることが既に知られている（白鳥 1970:349-351；村山 1979:146-153）が、そのうちの4語（1）～（4）がツングース諸語の方向語に対応していることがわかっている。

- |                           |                                |
|---------------------------|--------------------------------|
| (1) (68) *jiuen na        | (順奴)「東 (=左)」                   |
| (2) (69) *sien ~ kiuen na | (消奴)「西 (=右)」(「消」は「涓」の誤りと考えられる) |
| (3) (70) *kuan na         | (灌奴)「南 (=前)」                   |
| (4) (71) *juel na         | (絶奴)「北 (=後)」                   |
| (5) *kueilu               | (桂婁)「内 (=黄)」                   |

まず KG na は STg nā「地」に対応することは上記の三国史記の地名からもわかるが、それがさらにここでは確認されている。

具体的なツングース諸語の対応は以下の通りである。

(68) \*jiuen (順)「東 (=左)」

Evk	Sol	Neg	Orch
jūn「東」	jöndulā「東に」	jəγ inidēgd「左側」	jānje「左」
jəγ in (jəvin)「左」			
Udh	Olch	Ork	Na
jīəŋəjə「左」	jūəŋji ~ jəvunji「左」	jəvvŋji「左」	jəungie「左」
Ma	Jur	OJ	
jūn「左」	jewēn(者温)「右」	yo <sub>2</sub> o <sub>2</sub> 「横」	
		yo <sub>2</sub> k-「避ける」	

北ツングース諸語には「東」の意味が残り、南ツングース諸語では「左」が残ったと考えられるが、本来「南」を「正面＝前」にすると、「東」は右側となり、「東」＝「右」となることになるが、何かの理由で「左」となったと考えられる。即ち、「正面」が「南」ではなく「北」に変わったと見ることができる。それは北ツングース諸語では「東」であり、これが本来の意味であったからである。さらに女真語では「右」となっており、本来の意味を残しているからである。

(69) \*sien ~ kiuen (消)「西(＝右)」(「消」は「涓」の誤り)

Evk	Sol	Neg	Orch
(x) an- 「右」	angida 「右」	annida 「右側」	anj 「右」
Udh	Olch	Ork	Na
----	anji 「右」	ange 「右側」	anci; angia 「右手」
Ma	Jur		
----	----		

本来「東」＝「右」であったから、ここでの「西」＝「右」も同様に「右」ではなく、「左」であったはずである。この意味のずれはツングース祖語と何らかの関係があったはずであるが、その関係はこれだけからではつかみにくい。

(70) \*kuan (灌)「南(＝前)」

Evk	Sol	Neg	Orch
amar 「尻」	amaila 「北」	amaski 「後ろ」	----
Udh	Olch	Ork	Na
----	xamasi 「後ろへ」	----	xamasi 「後ろへ」
Ma	Jur		
amasi 「後方へ」	amargai (勿尸可) 「後ろ」		

この「南」＝「前」の関係が全く逆になっている、即ち、「南」＝「後ろ」になっていることから、「東」と「西」、「右」と「左」が逆転したのである。しかしながら、その形態自体を使用していることから、ツングース諸語との関係はだいぶ近いとも考えられる。しかし、方向語だけを借用することも可能である。この方向語は基礎語彙には入っていないことからその借用の可能性は高いともいえる。従って、借用なのか同系なのかはこれからはわからない。

(71) \*juel (絶)「北(＝後)」

Evk	Sol	Neg	Orch
julē 「前」	juldēdu 「前」	----	----
Udh	Olch	Ork	Na

ɟulɪə 「前」	ɟuli ~ ɟulu 「前の」	----	ɟulilə 「前」
Ma	Jur		
ɟulergi 「前方、南方」	ɟulesi (諸勒失) 「東」		
ɟuleri 「前」	ɟule 「前」		
ɟulesi 「前へ、南へ」			

他の方向語と同様に、「北」＝「前」となっているが、これは本来「南」であったはずである。これら四つの方向語の関連から、ある時期にこの4つの方向語をツングース祖語と共有していたものが、その後何らかの理由で「南」と「北」が入れ替わり、すべてが逆になったと考えられる。借用も可能性もあるが、四つすべてを共有しているところから、また方向語の入れ替わりから、同系性が強いのではないかと思う。

### 3.3 音韻的特徴

これまでに音韻的特徴として考えられるもの (cf. 李 1972:21-24) に古代日本語やツングース諸語の対応語彙との比較から見出されたものである。李 (1972:21-24) では語例が非常に少なく、その信憑性が低かったが、本稿ではそれを克服すべく、できるだけ多くの語例を挙げることにした。以下に語例をそれぞれの特徴の項目ごとに示す。

#### (1) 語末母音の欠如

KG	MK
(2) *bor (伐)	puru- 「緑」
~*puruk (伐力) [清瀬 : 91 12]	
~*ibor (伊伐)	
~*ipur (伊火)	
‘green (緑)’	

KG	MK
(9) *iboc- (伊伐支)	i'uc 「隣」
‘neighbors (隣)’	

KG	OJ
(11) *kapi (甲比)	kaFi 「峡」
~*kap (甲)	
‘cave, cavern, hole (穴)’	
~*ap (押)	

‘tube (管)’

< OKG \* $\gamma$  ap

この語例では語末の母音を持つ場合と持たない場合が見えるが、持つ場合は南部方言、持たない場合は北部方言である (李 1972 :21) と見られている。

KG	OJ	MK	TG
(20) *kun[m] (功木) ~*kum (ok) ‘bear (熊)’	kuma 「熊」	kuma (in ‘kuma-naŋa) kom	kuma 「アザラシ」 (Evk) kuma 「アザラシ」 (Lam)

KG	MK	TG
(23) * $\chi$ uər (忽) ~*kuər (骨) ‘walled city, fort (城)’	kol 「谷」	g olo 「街」 (Evk) holo 「谷」 (Ma)

KG	OJ	MK
(26) *meir (買戸) ‘garlic (蒜)’	mira 「菰」	manal 「蒜」

KG	OJ	MK
(32) *namur (乃勿) ‘lead (鉛)’	namari 「鉛」	nap 「鉛」

KG	OJ
(40) *puk (伏) ‘deep (深)’	Fuka- 「深い」

KG	OJ
(48) *tar (達) ~*tarir (達乙) ‘high (高) ~mountain (山)’	take <sub>2</sub> 「岳、山」 < PJ*talka-i

- |                         |          |
|-------------------------|----------|
| KG                      | OJ       |
| (61) **tən (*tan (旦))   | tani 「谷」 |
| ~*twən (頓)              |          |
| ~*t <sup>h</sup> ən (呑) |          |
| ‘valley (谷)’            |          |

- |                            |         |                    |
|----------------------------|---------|--------------------|
| KG                         | MK      | TG                 |
| (62) *ur (于戸)              | ulh 「垣」 | uri 「囲み、窪地、柵」 (Ma) |
| ‘having neighbors<br>(有鄰)’ |         |                    |

- |                                       |         |                  |           |               |
|---------------------------------------|---------|------------------|-----------|---------------|
| KG                                    | OJ      | SI               | TG        | OL            |
| (63) **wir                            | iri 「泉」 | ər (乙) 「井」       | uli 「川、水」 | erri; eri 「江」 |
| (*uyir[未]乙                            | wi 「井」  | (in *na-ər (奈乙)) | (Orch)    | (Nvh)         |
| ~*uir[於乙])                            |         |                  |           |               |
| ‘spring,source<br>(原) ; well<br>(泉井)’ |         |                  |           |               |

古代日本語、中期朝鮮語、ツングース諸語の対応語例を比較すると、古代日本語とツングース諸語では語末母音が消失せずに残存しているのに対し、中期朝鮮語、高句麗語は語末母音が既に消失している。これは高句麗語では本来語末母音があったものが、表記に使用した中期中国語の構築形では語末母音はないので、その後高句麗語では消失したと考えられる。これは地理的に接触している韓系言語である新羅語、中期朝鮮語でも(李 1959:133)同様の傾向を示しているといえる。

(2) /-i/語末母音直前の/-t-/の口蓋化

- |                  |          |
|------------------|----------|
| KG               | MK       |
| (9) *iboc- (伊伐支) | i'uc 「隣」 |
| ‘neighbors (鄰)’  |          |

- |                      |           |              |                       |
|----------------------|-----------|--------------|-----------------------|
| KG                   | SI        | TG           | AL                    |
| (13) *key (皆) < *kay | kan (翰、干) | χ a γ an 「王」 | qan, qa γ an 「王」 (Mo) |
| ~*keyc (皆次)          | 「王」       | (Jur)        | qa γ an 「王」 (OTk)     |
| ‘king (王)’           |           |              |                       |



- |                       |            |
|-----------------------|------------|
| KG                    | OJ         |
| (22) * $\chi$ uərc    | kuti 「口」   |
| ~*kurc (忽次)           | <PJ *kurti |
| ~*kuar (串)            |            |
| ~*k $\upsilon$ c (古次) |            |
| ‘mouth (口)’           |            |

- |                   |         |
|-------------------|---------|
| KG                | OJ      |
| (54) *uc (于次)     | itu 「五」 |
| < *uti ‘five (五)’ |         |

- |                          |          |
|--------------------------|----------|
| KG                       | MK       |
| (56) *yac (也次) [李:72 21] | -əzi 「親」 |
| ‘mother (母)’             |          |

ここでは/-c/ (次) (支) で表された漢字音は上記の「語末子音の消失」という規則的変化 (古代日本語に見られるような語末母音を保持していた形態から中期朝鮮語に見られるような語末母音の消失した形態への変化) があつたと考えられるため、母音/i/の前の/-t-/が口蓋化した場合でもこの規則が適用され、語末の母音/i/が脱落しその子音が語末に来るようになったと推測されるものである。このような変化は中期朝鮮語と新羅語にも同様に見られることもその傍証となると考える。李 (1972:21) ではこの語末子音の消失を朝鮮語の最大の音韻的特徴の一つとみなされているとしている。と同時に、この変化順序は口蓋化が語末母音消失よりも先に起こったことを示唆している。

さらにこの語の表記には次の二通り \*kurc (忽次) \*k $\upsilon$ c (古次) があり、これは方言的な差異であるとともに時代的な差異にも考えられる。この形態の違いから前者が古形を保っていると考えられる。これはちょうど Ma palga-n 「掌」 OJ pagi 「足、脚」 (MK pal 「足、脚」) に対応しており、この祖形は PJ \*pargi と考えられていることからその形態の古形の推定形態には/-r-/が存在していたものと考えられる。

### (3) 同化現象

- |                  |          |                 |
|------------------|----------|-----------------|
| KG               | OJ       | TG              |
| (33) *nanin (難隠) | nana 「七」 | nadan 「七」 (Ma)  |
| ‘seven (七)’      |          | nadan 「七」 (Evk) |
|                  |          | nadan 「七」 (Lam) |

同化現象はこの一例であるが、これは古代日本語の形態と同じ変化過程をたどったものと推測される。(但し、古代日本語ではさらに語末の子音が脱落した。) 即ち、語中の/-d-/ (ツ

ングース諸語に見られる) が語頭と語末の/n/の影響を直接的に受け、/-n-/に同化したものと見られる。この推測は従来最も一般的に受け入れられてきたものである。

(4) 語末子音の保持

- |                      |                     |         |
|----------------------|---------------------|---------|
| KG                   | OJ                  | MK      |
| (1) *biar (別)        | Fe <sub>1</sub> 「重」 | p l 「重」 |
| [cf. 李 72:22: *pj l] | <PJ *piCa           |         |
| ‘-fold, layer (重)’   |                     |         |

- |                     |                           |
|---------------------|---------------------------|
| KG                  | OJ                        |
| (15) *kil~*kir~*kin | ki;ko <sub>2</sub> i- 「木」 |
| (斤~斤乙)              |                           |
| ~*γey (脰)           |                           |
| ‘tree, wood (木)’    |                           |

- |               |         |             |
|---------------|---------|-------------|
| KG            | OJ      | SI          |
| (30) *mir (密) | mi- 「三」 | mir (推) 「三」 |
| ‘three (三)’   |         |             |

- |                      |                |
|----------------------|----------------|
| KG                   | TG             |
| (39) *piriar [B:02]  | biri 「浅い」 (Na) |
| ~*birər (比烈) [清瀬 91] |                |
| ~*biri (比里)          |                |
| ‘shallow (浅)’        |                |

- |                   |                         |                |
|-------------------|-------------------------|----------------|
| KG                | OJ                      | PK             |
| (41) *saipuk (沙伏) | so <sub>2</sub> Fo 「赤土」 | *sopi (所比) 「赤」 |
| ~*saipikon (沙非斤)  |                         |                |
| ‘red (赤)’         |                         |                |

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| KG               | OJ             |
| (43) *sirap (尸臘) | siro;sira- 「白」 |
| ‘white (白)’      |                |

- |               |                        |
|---------------|------------------------|
| KG            | OJ                     |
| (50) *tok (徳) | to <sub>2</sub> wo 「十」 |
| ‘ten (十)’     |                        |

KG	OJ	AL	OL
(53) *usi γ am (烏斯含) 'hare (兎)'	usagi 「兎」	tabis γ an 「兎」 OTk? )	osk 「兎」 (Nvh) oske 「兎」 (Ainu)

KG	MK
(49) *tawnpi (冬非) 'round (円)'	tung 「円」 (in tung-kur- 「円い」)

上記 (54) までは古代日本語の語例と比較すると、高句麗語と中期朝鮮語（新羅語（百濟語）にも語末子音が保持されていたと見られる）では語末子音の保持を示していると思える。それに対して最後の語例 (50) では語末音節の消失と考えられるが、このような対応を示す他の語例が見当たらないので、対応例としての信憑性を欠くかもしれない。

### 3.4 形態・統語的特徴

これまでに音韻的特徴として考えられるもの (cf. 李 1972:29-30) は古代日本語やツングース諸語の対応語彙との比較から見出されたものである。李 (1972:29-30) では語例が非常に少なく、その信憑性が低かったが、本稿ではそれを克服すべく、できるだけ多くの語例を挙げることにした。以下に語例をそれぞれの特徴の項目ごとに示す。

#### (1) 語順

語順に関してはこれまでほとんど何も言われてこなかったが、李 (1972:30) では以下の例を示している：

- 1) 王逢県 一云 皆伯                      2) 水入県 一云 買伊県

上記 1) では key (皆)「王」は目的語を表し、paik (伯)「逢」は動詞をあらわしているものと見られるが、もしこれが順に主語と述語（動詞）を示しているとしたら、あまり文としての意味をなさないと思われるので、目的語と動詞を表しているものと考えたほうがより理にかなう。2) では mey (買)「水」は主語を i (伊)「入」は述語動詞をあらわしているとみて問題ないとする。このことからこの動詞は自動詞であろうと判断できる。

しかしながら、このような例はほとんどなくこの 2 例からだけでその語順を判断するのは難しいが、この例が代表的なものであれば、高句麗語は全般的に日本語、朝鮮語、アルタイ諸語と同じ語順をしていたといえるかもしれない。この語順に関しては地理的な類型を示すことも多いので、この語順からだけでは同系関係を裏付けることはできないが、これまでに見たように、語彙・意味の対応、数詞の対応、基礎語彙の対応などを踏まえて考えた場合にはこの同語順という類型論的な観点も逆に強化できるように思われる。

## (2) 活用変化

李 (1972:29-30) では活用についても幾分言及しているが、結論として決定的な証拠となるようなものは見当たらない。

1) 穴城 一云 甲忽

2) 穴口郡 一云 甲比古次

上記の \*kap (甲)「穴」と \*kapi (甲比)「穴」の2通りの形態があるが、これを方言の違い、あるいは時期的な違いと考えられるが、これを活用という観点から考えられないかと李 (1972:29-30) は考えた。つまり \*kapi (甲比) の /-i/ が活用の一部とならないかと見た。実際にはそれがその直後の名詞 **kuc** (古次)「口」を修飾していると見ることは意味上から非常にむずかしいし、より整合的な意味から考えると、この名詞 **kapi** (甲比) とその直後の名詞 **kuc** (古次) はそれぞれ独立しているが、その二つが合体し一つの複合名詞 (ここでは一つの固有名詞) となっていると見たほうがよい。従って、形態・統語の変化を表すような痕跡をもつ語例は存在しないようである。

### 3.5 高句麗地名は高句麗語を表しているか

高句麗の旧領地である地名ははたして高句麗語であるのかどうかについては議論を踏まえる必要がある。即ち、ここで言う地名を示した言語とはどのような地理的分布をなし、どの時期の言語をさすかは議論の余地がある。

三国史記地理志の巻 35,37 に表された地名は現代の京畿、江原、黄海の3道とそれに接する忠北、慶北、咸南の一部を含む地域であり、本来ここは夫余系諸語を用いた濊、または夫余系の南下支流の百濟が興ったところである。4世紀から5世紀初頭にかけて公開土王とその後継の長寿王によって高句麗の版図に組み入れられたので、この地域は少なくとも新羅統一ころまで夫余系言語が行われていたと見られる。特に200年もの間高句麗の版図にあったのであるから、その影響は非常に大きかったと言える。しかし、その時期の高句麗語版図内の言語状況は明確ではないが、複数の方言が存在した可能性もある。特に地名などはこれまでの方言研究では非常に保守的な性格をもち、それ以前の言語の痕跡をとどめることは往々にしてあり、世界中の言語に見られる (例えば、Schostakowitsch, W.B. (1926) のシベリアの河川名に関する研究) が、高句麗版図内における高句麗では言語統一がなされていたとしても、比較的後代のことであるから、それ以前そこにすんでいた被支配民族の言語が残存していた蓋然性は大きいであろう。しかし、この地域のほとんどでは夫余系言語が行われていたので、高句麗語以前の言語が残存したとしても、それは高句麗語と非常に近い親縁関係をもつ姉妹語である可能性が高い。従って、厳密には高句麗語と呼ぶには問題があるかもしれないが、実際にはこの地名が一つの夫余系言語を代表していると考えて支障はない (李 1972:12-14)。これは高句麗語を代表言語として取り上げる消極的な理由であるが、このほかに李 (1972:14-18) は積極的な理由を5点あげている。それを概観すると次のようである：

1) 「勿 (使用漢字)」「城【意味】」、「内、奴 (使用漢字)」「壤【意味】」、「達 (使用漢字)」「山【意味】」、「巴衣、波兮 (使用漢字)」「峴、巖【意味】」などで特徴付けられる、百済や新羅には見られない、独特の地名を示しており、それが一つの言語を示唆している。

2) これらの地名が方言を示している。例として口を意味する今日の江華島と坡州に当たる地域では「古次」または「串」で表され[kuci]と読まれたであろうと考えられるのに対し、今日の始興・揚口などでは「忽次」と表されており[kurci]と読まれたと考えられ、後者が古形であろうと見られる。

3) 「三国史記」巻 37 は高句麗知名 (故高句麗南界) 百済地名と「三国有名未詳地分」を記載した後、「鴨緑水以北未降十一城」「鴨緑水以北新得城三」などを挙げ、鴨緑以北の地名が高句麗地名と同じ特徴を示しており、特徴的であるとし、具体的な語例を挙げている。

4) 「三国史記」の地名以外の史籍に現われる高句麗語資料には人名、官名、部族名などの少なからぬ固有名詞を見ることができる。これらは明らかに高句麗語を代表する確実な資料と言える。その例としていくつか具体例を挙げている。

5) 「三国史記」の高句麗地名が初期中期朝鮮語資料に現われるが、これは地名から構築される単語が一部統一新羅を経て高麗時代中期または朝鮮時代初期まで存続していたという事実から、この地名を表した言語がこの地方の本来の言語であるとする可能性は少ないと考えられ、従って、それは高句麗語である蓋然性が最も大であると思われる。

これらの積極的な理由は妥当であると考えるが、それをさらに強化する意味においても以下のより多くの語例に基づいた言語学的考察が不可欠である。

## 4. 古代日本語と対応する語彙

### 4.1 基礎語彙 (19 語が対応；以下数字のみを記載する)

以下に基礎語彙 (200 語リスト) として認められている、上記の古代日本語と比較できる高句麗語語彙を意味的領域から取り上げる。

#### 1) 代名詞 (ゼロ語)

なし

#### 2) 数に関するもの (2 語)

KG	OJ
(30) *mir (密)	mi- 「三」
‘three (三)’	
(54) *uc (于次)	itu 「五」
< *uti ‘five (五)’	

#### 3) 形容詞 (1 語)

(46) \*su (首)  
'new (新)'

sa-「若い、早い」

4) 人間に関するもの (1 語)

(7) \*gu (仇)  
'child (童～童子)'

ko<sub>1</sub>「子ども」  
<PJ \*kuCa

5) 身体に関するもの (2 語)

(10) \*kan (根) [B.02 5]  
'head (首～頭)'

kauFe「頭」 <\*kami-Fe?

kasira「頭」

kabu「頭」

kami「頭髮；頭」

kaFo「顔」

kuti「口」

(22) \*χ uərc  
~\*kurc (忽次)  
~\*kuar (串)  
~\*k v c (古次)  
'mouth (口)'

6) 動作に関するもの (ゼロ語)  
なし

7) 自然界に関するもの (7 語)

(6) \*γ ap (盒) ~\*kap (岬)  
~\*ap (押) 'west (西)'

yama「山」  
<PJ \*jama

~\*γ aip (峽)

~\*-ap (臘)

'high mountain  
peak (嶽～岳)'

<OKG\*γ apma  
(盒馬;蓋馬)

'high mountains  
(大山)'

(28) \*mey (買)  
'river (川) ,  
water (水)'  
< \*mer

mi「水」  
(cf. nari (那利) ,nare (那礼)「川」)

- (31) \*nami (内米) nami 「波」  
 ‘pond,lake (池、長池)’  
 (34) \*na (奴) na 「地」  
 ‘land,earth (壤)’  
 (38) \*patan (波旦) wata 「海」  
 ‘ocean (海)’  
 (48) \*tar (達) take<sub>2</sub> 「岳、山」  
 ~\*tarir (達乙)  
 ‘high (高)  
 ~mountain (山)’  
 (52) \*t v ~\*dzi (ir) mi-ti 「道」  
 ~\*tsi (ir) (助乙)  
 ‘road (道)’

8) 生物およびその関係するもの (ゼロ語)  
 なし

9) 植物に関するもの (1 語)

- (15) \*kil~\*kir~\*kin ki;ko<sub>2</sub>i- 「木」  
 (斤~斤乙)  
 ~\*γey (盼)  
 ‘tree,wood (木)’

10) 色彩に関するもの (3 語)

- (14) \*kəmur (今勿) kuro 「黒」 kəmur (今勿) 「黒」  
 ‘black (黒)’  
 (41) \*saipuk (沙伏) so<sub>2</sub>Fo 「赤土」  
 ~\*saipikon (沙非斤)  
 ‘red (赤)’  
 (43) \*sirap (尸臘) siro;sira- 「白」  
 ‘white (白)’

11) その他 (2 語)

- (17) \*kor (居戸) ko<sub>2</sub>ko<sub>2</sub>ro<sub>2</sub> 「心」  
 ‘heart,mind (心)’  
 (35) \*na (耐~那) na 「中」  
 ‘in, inside (内)’

因みに基礎語彙 (200 語) にはいない日本語との対応語 (28 語) の番号は以下の通りである：

- (1) (4) (8) (11) (12) (18) (20) (21) (23) (25) (26) (27) (32) (33) (36) (40) (45)  
(50) (53) (57) (58) (59) (60) (61) (63) (65) (66) (67)

以上の結果から基礎語彙として考えられるものが 19 語あり、その中でも数詞 (2 語)、身体に関するもの (2 語)、自然界に関するもの (7 語)、色彩に関するもの (3 語) がその語彙が多い項目であるが、特に自然界に関するものがずば抜けて多い。

#### 4. 2 数詞 (4 語)

KG	OJ
(30) *mir (密) ‘three (三)’	mi- 「三」
(33) *nanin (難隠) ‘seven (七)’	nana 「七」
(50) *tok (徳) ‘ten (十)’	to <sub>2</sub> wo 「十」
(54) *uc (于次) < *uti ‘five (五)’	itu 「五」

ここで大切なことは新羅語においても百濟語においても「3」を除いて「5,7,10」の三つの数詞が「三国史記」には表れないし、他の資料にも全くこの三つの数詞が見られない (下記参照) ことである。またこの四つの数詞は中期朝鮮語には全く表れず、他の形態をもつ数詞が使われていたという事実である。従って、高句麗語のこの三つの数詞は新羅語にも百濟語にも共通して使われていたとはいいがたく、多分他の形態を持つ数詞が使用されていた、即ち、異なった言語 (極端に異なった方言とも考えられる) が行われていたと考えたほうが理にかなっているようにも見える。

これまで数詞の比較は上記の四つに限られていたが、塚本 (1993:94-103) はこのほかに比較可能な数詞はほかにあるだろうという可能性を示した。それは数詞「1」、「6」、「8」、「9」であるとした。まず「三国史記地理誌」巻 34 に現われる、漢数字「一」に対応する漢語 (尚)、(星)、(直) の意味から抽出される語形 /pəra/ (尚) , /pjər/ (星) , /para/ (直) の子音 (即ち、/p/ と /r/) や漢数字ではないがその意味をもつ漢語「単」 (即ち「1」の意味で使われたと仮定して) に対応する mudon (武冬) (巻 34) の語形の子音 (即ち、/m/ と /d/) が音節ごとに pito<sub>2</sub> 「1」にほぼ一致するため (/p/-/p/;/r/-/t/; /m/-/p/;/d/-/t/)、これも対応する数詞に含めてよいのではないかとした。これらの対応にある程度の信憑性があると考え、高句麗語の数詞「1」も新羅語と日本語に共通していたと考えられる。ただこの数詞が表れるのは新羅 (辰韓) の地域に偏っている。また、高句麗と百濟の北部地域では「3」にあたる漢字の「三」を「彡」で表してあり、これは漢字そのものを利用した音と訓の両方を表したものである。従っ



て、これからも高句麗、百済、新羅に共通した「3」に当たる形態素が使われていたと見ることが出来る。従ってこの地域（新羅（辰韓））では「1」と「3」が高句麗語、古代日本語の数詞「1」と「3」と同じであると考えられる。しかしながら、その他の数詞に関しては三国共通して見られる数詞はないと考える。

yuk（育）「6」は「三国史記」巻 35 に1例あるが、これは百済にのみ見られる。塚本（1993:105-106）ではこの読みを訓で置き換え、その意味を変換し（「よく育つ」>「熟す」）ながら、さらにそれを中期朝鮮語の形態（muru-「熟す、熟してやわらかくなる、じゅくじゅくする」）に変換し、それを OJ mu-「6」と比較しているので、その信憑性はあまり高くないように思われる。

次に nin（仁）「8」は「三国史記」巻 34、37 にそれぞれ2例ずつ見られるが、塚本（1993:103-105）はこの漢字音「仁」は訓読みすべきであるとし、dir-と読ませ、意味は「情け深い、善良な、悲しみ深い」であり、OJ ya < PJ \*da-となることを念頭に置き、これが-dir-の-di-に対応するとし、中期朝鮮語ではその dir- から jədʌrp「8」が生じたとした。しかしこの古代日本語の「8」の形態にせよ中期朝鮮語のその形態にせよ、その変化（音節の脱落）が著しく、果たしてそのような規則的な脱落があったかどうか疑わしい。従って、この説明も非常に恣意的だといわざるを得ず、その信憑性も低い。

最後に tor（突）「9」は「三国史記」巻 36 の百済に1例のみ見られる。塚本（1993:106）はこの漢字音「突」は訓読みすべきであるとし、kur-と読ませ、これを OJ ko<sub>2</sub>ko<sub>2</sub>no<sub>2</sub>-「9」と比較した。これは KG \*kur「心」を OJ ko<sub>2</sub>ko<sub>2</sub>ro<sub>2</sub>「心」と比較できることから考えると、この「9」の比較も蓋然性があると考えられる。しかし、この形態が高句麗と新羅の資料には表れないので、この形態がこの後者2国でも使われていたかどうかは不明である。それに対して古代日本語の形態 OJ ko<sub>2</sub>ko<sub>2</sub>no<sub>2</sub>-「9」と類似形が百済で見られると考えられることと高句麗の四つの数詞が対応していることから考え合わせると、朝鮮半島の3国では同じような数詞が使われていたとも考えられる。

しかしながら上記のように中期朝鮮語では全く異なった形態素が使用されていたことを想起すべきであるが、その時期的相違の合理的な説明は異なった言語に取って代わられたという接触による以外にはないように思われる。即ち、新羅地域で話されていた言語がその後中期朝鮮語の時期には他の有力な方言に取って代わられたという蓋然性である。

#### 4.3 日本語との親縁関係

上に見る数詞を除いてこのように比較可能な語彙が多い項目が存在していることは高句麗語と古代日本語との親縁関係を強化しているのである。

またこのような非常に少ない全体語彙数の中で19語もの多くの単語が基礎語彙として存在していることは驚愕に値する。これは上記のごとく借用関係であるとは考えられず、同系関係を強く示唆している。

さらに上記にみたように高句麗語の数詞が四つ（「1」も含めると五つ）も対応する言語は日本語以外には存在していない点は非常に重要であり、このような言語は他には世界中のどの

言語にも存在していない点は強調しても強調し足りない。

## 5. 中期朝鮮語と対応する語彙

### 5.1 基礎語彙 (10 語)

#### 1) 代名詞 (ゼロ語)

なし

#### 2) 数に関するもの (ゼロ語)

なし

#### 3) 形容詞 (3 語)

(19) \*kuərʔiy< kəcul- 「荒」

\*\*kuər γ iy (骨衣)

‘wilderness, wasteland,  
to be rough (荒)’

(42) \*seneri (沙熱伊) [清瀬 : 91 12] sənīl- 「涼」

‘breeze (清風)’

(46) \*su (首) sai 「新」

‘new (新)’

#### 4) 人間に関するもの (ゼロ語)

なし

#### 5) 身体に関するもの (ゼロ語)

なし

#### 6) 動作に関するもの (ゼロ語)

なし

#### 7) 自然界に関するもの (5 語)

(28) \*mey (買) mir 「江」

‘river (川),  
water (水)’

< \*mer

(34) \*na (奴) na-rah 「地」

‘land, earth (壤)’

- (36) \*paʔiy (巴衣) pahoi 「岩」  
 ～波衣  
 ~\*paγey (波兮)  
 ‘cliff (巖),  
 rock (岩),  
 precipice (峴)’

- (38) \*patan (波旦) patah 「海」  
 ‘ocean (海)’

- (44) \*sork (息) [清瀬 : 91 11] hark 「土」  
 ‘soil (土)’

8) 生物およびその関係するもの (ゼロ語)

なし

9) 植物に関するもの (ゼロ語)

なし

10) 色彩に関するもの (2 語)

- (2) \*bor (伐) puru- 「緑」  
 ~\*puruk (伐力) [清瀬 : 91 12]  
 ~\*ibor (伊伐)  
 ~\*ipur (伊火)  
 ‘green (緑)’

- (14) \*kəmur (今勿) kəm 「黒」  
 ‘black (黒)’

11) その他 (ゼロ語)

なし

## 5.2 数詞 (ゼロ語)

なし

因みに基礎語彙 (200 語) にはいない中期朝鮮語との対応語 (22 語) の番号は以下の通りである (22 語) :

- (1) (3) (9) (12) (16) (18) (20) (21) (23) (25) (26) (27) (29) (32) (45) (47)  
 (49) (55) (56) (62) (64) (67)

### 5.3 中期朝鮮語との親縁関係

高句麗語と中期朝鮮語の間に共通して見られる語彙は 10 語であり、以下に見るツングース諸語との間のそれとあまり変わらない。さらに共通する最も多い項目が「自然に関するもの」であり、ツングース諸語と共通する語がほとんどであり、さらに古代日本語と共通する語も多くあることも特徴的である。その共通する項目とその共通する語の少なさから判断してその関係が接触によるものか同系によるものかは明言できないが、数詞の共通性(「1」「3」)からみると接触によると見るより同系と見たほうがよいと考える。さらに古代日本語と中期朝鮮語との関係はその対応語やウィットマンの規則(板橋:2002; Vovin:2001)から判断して、両言語は同系関係であると考えられるからである。従って、中期朝鮮語は韓系方言という名称を与えられるかもしれないのに対して、高句麗語と日本語は夫余系方言としても間違いではないように思う。技術的にはこの双系の言語群の関係は異なる「言語」と考えたほうが妥当か異なった「方言」と考えたほうが妥当かは難しいように思われる。しかし、どちらにしても同系関係を持った言語群、あるいは方言群だと考えてよいと思われる。

## 6. ツングース諸語と対応する語彙

### 6.1 基礎語彙(8語)

#### 1) 代名詞(ゼロ語)

なし

#### 2) 数に関するもの(1語)

KG

(33) \*nanin (難隠)

‘seven (七)’

TG

nadan 「七」(Ma)

nadan 「七」(Ma)

nadan 「七」(Lam)

#### 3) 形容詞(ゼロ語)

なし

#### 4) 人間に関するもの(1語)

(7) \*gu (仇)

kuŋa 「子ども」(Evk)

‘child (童～童子)’

#### 5) 身体に関するもの(ゼロ語)

なし

#### 6) 動作に関するもの(ゼロ語)

なし

7) 自然界に関するもの (5 語)

- |                              |                  |
|------------------------------|------------------|
| (28) *mey (買)                | muke 「水」 (Ma)    |
| ‘river (川)’                  | mü 「水」 (Jur)     |
| water (水)’                   | mu 「水」 (Evk)     |
| < *mer                       |                  |
| (31) *nami (内米)              | namu 「海」 (Ma)    |
| ‘pond,lake (池、長池)’           | lamu 「海」 (Evk)   |
| (34) *na (奴)                 | nā 「地」 (ST g)    |
| ‘land,earth (壤)’             | nā 「土、地」 (Jur)   |
| (44) *sork (息) [清瀬 : 91 1 1] | siru 「砂」 (Na)    |
| ‘soil (土)’                   |                  |
| (63) **wir                   | uli 「川、水」 (Orch) |
| (*uyir[未]乙                   |                  |
| ~*uir[於乙])                   |                  |
| ‘spring,source               |                  |
| (原) ; well                   |                  |
| (泉井)’                        |                  |

8) 生物およびその関係するもの (ゼロ語)

なし

9) 植物に関するもの (ゼロ語)

なし

10) 色彩に関するもの (ゼロ語)

なし

11) その他 (1 語)

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| (17) *kor (居戸)   | huhun 「乳、乳房」 (Ma) |
| ‘heart,mind (心)’ | ukun 「乳」 (Evk)    |

基礎語彙として考えられるのは8語のみだが、高句麗語との対応語全体語彙数が 20 語なので、基礎語彙数は決して少ないとはいえない。またここでも対応する基礎語彙のほとんどが「自然に関するもの」で5語もある。しかしながら、その対応語に上記に見るように偏りが多く、その点が親縁性の有無については気がかりな点である。しかし逆にこれは単にその他の基礎語彙がみつからなかったためか、あるいは実際に対応する基礎語彙がないからなのかはわからないが、「自然に関するもの」で5語あることから推測すると、その親縁性がなく、接触によるも

のではないかという蓋然性が大きいかもしれない。

因みに基礎語彙 (200 語) にはいないツングース諸語との対応語 (14 語) の番号は以下の通りである：

(6) (8) (12) (13) (16) (20) (21) (23) (24) (25) (27) (37) (39) (62)

## 6.2 数詞

KG	TG
(33) *nanin (難隠)	nadan 「七」 (Ma)
' seven (七) '	nadan 「七」 (Evk)
	nadan 「七」 (Lam)

D.Sinor (1973) は Beckwith との会話の中で「この Kog. nanin 「七」 の同源語はユーラシア全体にまたがり見られる傾向がある」といっているが、はたして本当に他の語族、例えば、ウラル語族にも見られるものであろうか？；そうではないであろう。大陸ではツングース諸語のみに見られるものである。Beckwith (2002:13) は「高句麗語のなかでツングース諸語と同源語として表れる語はこの語 nanin 「七」 だけであり、他にはなく、ユーラシア全体にまたがり見られる傾向がある (D.Sinor 1973 : Beckwith との会話) ので、ツングース諸語との対応は無意味である」としている。しかし、逆に Beckwith の明言どおりであれば、ツングース諸語と日本語、そして高句麗語が酷似しているということは大変重要な意味を持つものであると考える。

## 6.3 ツングース語族との親縁関係

上記の基礎語彙と数詞の対応語彙数から見ると、項目上の偏在はあるにしてもその偏在が「自然に関するもの」のみであり、それはとりもなおさず高句麗語がツングース語族と近くはないが、何らかの関係があったことを示唆しているように見える。数詞に関しても nanin 「七」 は上で議論したように、東北ユーラシアに共通しているものではなく、従って、この数詞一つからもツングース語族とのなんらかの関係を推すものであると考えられる。

事実上この基礎語彙と数詞の2項目しかツングース語族と同系関係を推すものはないが、一般に借用関係のみから「自然に関するもの」だけ5語が共通して存在しているとは考えにくいようにみえる。混成言語のマー語における他語族の言語から借用された基礎語彙には「自然に関するもの」が全くないことから推測して（これはどの程度まで一般化できるかは問題であろうが、傍証してのみ有効であるが）、高句麗語とツングース語族の間には遠隔の親縁関係があったと推測できるかもしれない。それはそのほかの対応する基礎語彙がみられないからである（上述のとおり偶然ここでは基礎語彙に現れなかった可能性もないわけではない）。この点だけを焦点にすると以下で見る Beckwith の言うように借用関係ということになる。

Beckwith は高句麗語とツングース語族との関係は接触によるものであって同系関係ではないと明言しているが、その可能性が大いにある。即ち、高句麗語はツングース語族と接触はあったものの、あまりその接触頻度と程度が多くなかったことと本来の高句麗語の地理的・年代的位置（中国大陸中南部から北上し、朝鮮半島北部から中国東北地方の南よりに移動・定着）がツングース語族とは近くなかった為、ツングース化することがすくなかったのだと考えられる。対応語彙があまりにも少ないので、双方の関係についての判定が非常に難しいのであるが、重要な基礎語彙の対応があまりにも少ない点から見ると借用関係であったとするほうがより妥当なのではないかと考えられる。

しかし、地理的位置を考慮したうえで高句麗語では日本語との対応語数が他のどの言語よりも多いことと数詞がこれまでよく一致した言語は他にはないのであるから、高句麗語と日本語の関係は同系と考えてもよいだろう。そうするとなぜ高句麗語にはツングース的要素が少ないのに対し、日本語にはツングース的要素が多い（板橋 2002）のかという疑問が生じる。日本語の中に見えるツングース語族の対応語彙が多いということはこのツングースの要素が同源または借用ということになる。が、これは言語混成から考えるとどちらも本来の意味での同源性を持たないことになることがある。つまり、ある特定の状況下においてその言語の祖語は一つではなく二つになり、基礎語彙は本来の基幹言語が主に有し、後来言語の形態・統語が基幹言語に流入した場合、その文法は他の言語から継承したものになるため、その文法借用は同源と見ることも可能になるからである。

即ち、日本語のツングース的要素はオーストロネシア系言語が全盛していた日本列島に主に後来のツングース系言語に交代することで混成化し、そのときに先来のオーストロネシア系言語の形態・統語の部分のほとんどがツングース化すると同時に本来の基礎語彙の一部もツングース化して日本祖語ができたとする。そのように考えたとき始めて、日本語の中にツングース系語彙が多く存在する原因が理解できる。

## 7. オーストロネシア諸語と対応する語彙

### 7.1 基礎語彙（8語）

以下に基礎語彙（200語リスト）として認められている、上記のオーストロネシア諸語と比較できる高句麗語語彙を意味的領域から取り上げる。

#### 1) 代名詞（ゼロ語）

なし

#### 2) 数に関するもの（ゼロ語）

なし

#### 3) 形容詞（1語）

KG

OL

(40) \*puk (伏)

‘deep (深)’

\*buka 「開いていること」 (Pau)

4) 人間に関するもの (ゼロ語)

なし

5) 身体に関するもの (ゼロ語)

なし

6) 動作に関するもの (ゼロ語)

なし

7) 自然界に関するもの (3 語)

(36) \*paʔiy (巴衣

～波衣)

~\*paɣey (波兮)

‘cliff (巖),

rock (岩),

precipice (峴)’

\*batu 「石、岩石」 (Pau)

(48) \*tar (達)

~\*tarir (達乙)

‘high (高)

~mountain (山)’

\*tsakay 「上昇」 (Pau)

(63) \*\*wir

(\*uyir[未]乙

~\*uir[於乙])

‘spring,source

(原); well

(泉井)’

\*wayəv 「水」 (Pau)

8) 生物およびその関係するもの (1 語)

(4) \*cinia (次若)

‘head (of a bull) (頭)’

tunu 「角」 (Pind)

9) 植物に関するもの (1 語)

(15) \*kil~\*kir~\*kin

(斤~斤乙)

\*kahiu 「木」 (Pau)



~\* $\gamma$ ey (脣)

‘tree, wood (木)’

1 0) 色彩に関するもの (2 語)

(14) \*kamur (今勿)

\*lap 「暗闇」 (Pind)

‘black (黒)’

(43) \*sirap (尸臘)

\*siraR 「光」 (Pau)

‘white (白)’

1 1) その他 (ゼロ語)

なし

因みに基礎語彙 (200 語) にはいないオーストロネシア語族との対応語 (3 語: すべて接辞) は以下の通りである。

(65) (66) (67)

以上の結果から基礎語彙として考えられるものが 8 語あり、その中でも自然界に関するもの (3 語)、植物に関するもの (1 語)、色彩に関するもの (2 語) が多い項目であるが、特に自然界に関するもののなかでも「水」「岩」、植物に関するもの「木」などの項目において対応しているが、基礎語彙とはいえ借用されることもあるので、これからだけでは判定しがたい。

## 7.2 数詞 (ゼロ語)

数詞においてはオーストロネシア語族と対応するものは見出されないが、高句麗語では日本語との比較において「3」「5」「7」「10」が対応しているのを上記のように見たが、オーストロネシア語族と日本語との間では「1」「2」が対応し、「4」「7」「8」「9」はアルタイ諸語と日本語の間で共通する数詞 (「5」がひょっとしたら同源である可能性がある) である。残りの「6」は起源が不明である。基礎語彙の数詞 (「1」~「5」) であろうがあるまいが無関係に高句麗語とオーストロネシア語族と対応するものは見出されないのである。このことだけからは両言語も親縁性が非常に少ないということを暗示しているように見える。

## 7.3 オーストロネシア語族との親縁関係

上に見る数詞を除いてこのように比較可能な語彙がある程度存在していることは高句麗語とオーストロネシア語族とは借用関係にあることを示唆しているようである。

またこのような非常に少ない全体語彙数の中で 19 語もの多くの単語が基礎語彙として存在していることは驚愕に値すると思われる一方、基礎語彙 100 項目を考えた場合でも 19 項目の

一致では少なく、借用関係といえるかもしれない。もし借用であるとしても古アジア語の古い時期に借用されたものであると思われる。これは上記のごとく借用関係を暗示しているが、可能性として同系関係もあるかもしれないことも示唆している。

## 8. 結論

これまでの結果から推測される高句麗語、日本語、朝鮮語の成立のシナリオを考えると次のようになる。

まず中国大陸中南部付近に存在したであろう古アジア系言語が、途中で接触度合いは異なるものの、殷語やチュルク系言語やオーストロネシア系言語と接触しながら北上し中国東北地方南部と朝鮮半島北部に移住・定着した。この時点で既に高句麗語に分岐しておりその他の夫余方言が周辺に存在していた。高句麗語はツングース諸語との接触により借用関係のみに終始したと考えられる。これは**古アジア系言語を基盤とした夫余祖語**の段階でも高句麗語の段階でもその南方の韓系方言の勢力と北方周辺の他の夫余方言の勢力がたぶんに働き、ツングース諸語の基礎語彙や文法項目の影響を多大に受けずに7世紀後半まで高句麗語の独立性を保持することができた。

これに対し、前日本祖語の初期には、九州や本州には朝鮮半島経由や中国大陸からの古アジア系言語が先来し、その後南方からのオーストロネシア系言語が後來し、地域により言語が混在していたと思われる。その後**古アジア系言語は前日本祖語の基層となり、その基層をもつオーストロネシア系言語が前日本祖語として成立していった**と考えられる。そして前日本祖語の中期、後期には、島という地理的制約によって言語が互いに借用関係の状態にあった言語群の中に**幾度かの大きな北部からのツングース系言語や韓系言語が局部的・集中的に多量流入した**と推測される。つまり、**古アジア系言語を基層にもつオーストロネシア系の前日本祖語**に対して日本列島到着以前と以後の両時期に渡って、単なる文化語彙の借用のみならず、形態・統語においてもツングース諸語が多大な影響を与え、前日本祖語（非混成語）を混成言語の初期段階である日本祖語（混成語）に導いた。

朝鮮語は古アジア系言語が朝鮮半島南部にさらに移動したものが、土着の言語と接触して独自の発展を遂げたものであるが、夫余系言語との言語差はそれほど大きくなかったと考えられる。このいくつかの韓系方言が統廃合を繰り返し統一新羅語になり、さらにそれが中期朝鮮語に発展していった。

この史的言語変遷過程がツングース諸語に対して高句麗語と古代日本語の語彙項目と対応語彙数の違いであろうと考えられる。この違いの要因となったのは多分言語の集合密度とその集団の大きさ、そして言語の文化背景や支配力による勢力であろうと見られる。それが高句麗語の中に見られる色々な言語との対応語が多く見られる所以であろう。

最後に本稿は史学的資料と比較言語学の理論を応用して高句麗語の起源とその姉妹語を明らかにしようとした意欲的試論であり、可能性の高い仮説として提出したものである。

## 文献

- Beckwith, Christopher (2002) *On Korean and Tungusic elements in the Koguryo language*, (mimeograph version) Indiana University.
- 李基文 (1967) 「韓国語形成史」『韓国文化史体系 V : 言語文学史』19—112 ソウル : 高麗大学校民族文化研究所。
- (1968) 「高句麗語の言語とその特徴」『白山学報』4 : 101—142 (=1972 「高句麗語の言語とその特徴」『韓』vol.1, No.10 3—36)。
- 李崇寧 (1967) 「韓国方言史」『韓国文学大系 V』323—411. ソウル : 高麗大学校民族文化研究所。
- 板橋義三 (1996) 「高句麗、新羅、百濟の古代三国における『尸』の音価とその言語的相違」『言語科学 (九州大学大学院言語文化研究院紀要)』31 : 15—38。
- (2002) 「古代日本語の混成性—アルタイ系言語とオーストロネシア系言語との混成—」『言語科学 (九州大学大学院言語文化研究院紀要)』37 : 11—33。
- Janhunen, Juha and Kho Songmoo (1982) Is Korean related to Tungusic?. *Hangul* 177: 179—190.
- 金沢庄三郎 (1985 ; 1912) 『日韓古代地名の研究』(復刻版)、東京 : 草風館。
- 金漢芳 (1983) 『韓国語の系統』東京 : 三一書房。
- 金富軾 (1928) 『三国史記』京都 : 朝鮮史学会。
- 金思燁 (1981) 『古代朝鮮語と日本語』東京 : 六興出版。
- 金完鎮 (1972) 「高句麗語における t 口蓋音化現象について」『韓』vol.1, no.10 37—47。
- Kiyose, Gisaburo N., (1986) Tungus and other elements in the languages of the three Kingdoms. *Korean Linguistics* 4 : 17—26.
- 清瀬義三郎則府 (1991) 「借用語源の錯綜と言語系統論—アルタイ諸語・古朝鮮三国語・日本語—」『語源探求 3』336-349 東京 : 明治書院。
- 河野六郎 (1945) 『朝鮮語方言学試攷』ソウル。
- Lee, Ki Moon (1963) A genetic view on Japanese 『朝鮮学報』27 : 94—105.
- (1975) Remarks on the comparative study of Korean and Altaic. *Proceedings of the international symposium commemorating the 30<sup>th</sup> anniversary of Korean liberation*, 3-35 National Academy of Sciences, Republic of Korea.
- Miller, Roy (1979) Old Japanese and the Koguryo fragments: a re-survey. In: George Bedell (ed) *Exploration in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*, 348-368, Tokyo: Kenkyusha.
- (1979) Some Old Paekche fragments. *Journal of Korean Studies* 1: 3—69.
- 三上次男 (1977) 『古代東北アジア史研究』東京 : 吉川弘文館。
- 宮崎道三郎 (1906-7) 「日韓両言語の比較研究」『史学雑誌』17 : 7—10, 12 : 18 : 4, 8, 10, 11。
- 村山七郎 (1962) 「日本語及び高句麗語の数詞—日本語系統問題によせて」『国語学』48 : 1—11。
- (1963) 「高句麗語と朝鮮語と関係に関する考察」『朝鮮学報』26 : 25—34。
- (1988) 『日本語の起源と語源』東京 : 三一書房。
- 国分直一 (1979) 『原始日本語と民族文化』東京 : 三一書房。

Schostakowitsch, W.B. (1926) Die historisch-ethnographische Bedeutung der Benennungen sibirischer Flüsse. UJ 6—1,2.

辛容泰 (1987) 「高句麗の地名に残る日本語の数詞」『月刊言語別冊 総合特集 日本語の古層』16 (7) : 130—144。

—— (1991) 「日本語の起源について—日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る」『語源探求』4 : 299-348 東京：明治書院。

辛兌鉉 (1958) 「三国史記地理志 ui 研究」『新興大学校論文集』、第一集、ソウル：新興大学校。

新村出 (1916) 「国語及び朝鮮語の数詞について 1—2」『芸文』7 (2) : 119-131 ; 7 (4) : 353-367。

白鳥庫吉 (1970) 『白鳥庫吉全集 第三卷』東京：岩波書店。

Street, John (1978) *Altaic elements in Old Japanese, part 2 (draft version)*. Madison, Wisconsin.

塚本勲 (1993) 「高句麗・新羅・百濟語の数詞と日本語」埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』87—108 東京：朝倉書店。

Yi, Dung Lyong (1982) *Syntactic and semantic similarities in Turkic and Korean*. Unpublished doctoral dissertation, University of Washington.

俞昌均 (1961) 「古代地名表記 ui 声母体系—主 ro 三国史記 ui 地理志 rur 中心 uro-」『青丘大学論文集』第3集 ソウル：青丘大学校。

以下の論文は拙論を執筆する時には間に合わなかったが、後に参考にした。

河野六郎、他 (1993) 『三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究』

平成 2, 3, 4 年度科学研究費補助金 一般研究 (B) 研究成果報告書。

李基文 (1995) 「『三国志記』に見える地名の解釈」『朝鮮文化研究』2 : 1—12。

福井玲 (2000) 「海外言語学の最近動向 6 朝鮮語学 朝鮮語の歴史的研究における二つの話題」『月刊言語』27 : 104-111。

# A Study of the Historical Relationship of the Koguryo Language, the Old Japanese Language, and the Middle Korean Language on the Basis of Fragmentary Glosses Preserved as Place Names in the Samguk Sagi

ITABASHI Yoshizo

*University of Kyushu*

**Keywords:** Place Names in Samguk sagi, Old Asian Languages, Koguryo Language, Middle Korean, Old Japanese, Language Contact, Mixed Languages

This paper is an attempt to find out the historical relationships of the Koguryo Language to the Old Japanese and the Middle Korean Language from a fragmentary vocabulary obtained through the methods of phonetic reconstruction from Chinese characters used phonetically and semantically to transcribe the place names appearing in the Samguk sagi. It is found that Koguryo may be closest to Japanese and second closest to Middle Korean from the number of the cognates, especially in the categories of numerals and basic vocabulary. Koguryo also appears to have some residual cognates with Austronesian and Old Asian languages as substrata. This fact strongly implies that Koguryo would be genetically related not only to Japanese but Korean.